

# 「定年退職をむかえて」

武徳育研究所長  
教授 中島 豺

本編は「Commemorative International Judo Camp in Australia April 2014」（2014年国際柔道記念合宿オーストラリア）と云うのが本タイトルであり、それを私の退職記念誌として翻訳したものである。それは、私が大学卒業後、1971年から1981年帰国までの10年間に渡り、ニュージーランドとオーストラリアはタスマニア州に滞在した時の友人たちの思い出話を集め今回開催される記念合宿の記念誌としたものである。

私は、昭和39年4月(1964)国士舘大学体育学部体育学科に入学、柔道部に入部と同時に「富士見寮」に入寮。当時は初代柴田徳次郎館長(1890～1973)がご健在であり、寮生は早朝5時大講堂の大太鼓の音で起床、まずは部屋並びに校庭等の清掃から始まる。その後、朝稽古が2時間、その後食事当番が作った朝食。そして、授業が9時から午後3時頃まで行われ、午後の稽古は3時30分から6時30分までが日課であった。

さて、私が外国に興味を持った経緯は、1964年の東京オリンピックです。アジア地域で初めてのオリンピックが日本で開催され、体育学部の学生、2、3年生は全員、1年生は選抜で大会の学生補助委員として参加、ラッキーに選ばれたが駐車場係りであった。しかし、航空自衛隊インパルスによる大空に描かれた五輪の環の美しかったことを今も明確に思い出します。

つぎに、大学2年生の時に国士舘大学1期生柔道部の小林惣重郎先輩がU S Aより帰国され影響を受けたことです。

そして、1970年“世界万国博覧会 Expo 70”です。多くの外国人観光客が来日、その中に武道の修行者であったニュージーランド人のジョン・ボニフェス氏が京都正武館道場に入門し、私と友人関係となった次第です。

翌年万博が終わり、ボニフェス氏が帰国直前時に「ミスター、ナカジマ もし可能なら私の道場に指導に来てくれないか？」という誘いに、十分に興味があったので、即答OK、貨客船に乗り42日間の初旅となった。

1971年～1972年は、ニュージーランド・クラストチャーチ市。

1972年～1973年は、オーストラリア。(シドニー市とタスマニア州)

1974年～1981年は、タスマニア州警察学校。(一般体育と柔道・逮捕術を指導)

帰国後、1981年から今日まで、国士舘大学勤務。(勤続33年現在に至る)

また、在任中タスマニア柔道連盟において強化を目的とした合宿を企画、その合宿を今回、私の定年に合わせて現地で再開することになり、記念誌をタスマニア時代の仲間が制作した次第です。(1971年～1981年、出発から帰国までの記録)

また、このメモリアル合宿記念誌の翻訳に関して、上智大学のMaja Sori DOVAL (ソリドーワル・マーヤ)先生のご協力に感謝申し上げます。

では、始まり始まり、、、。

序文	3
第1章 はじめに	4
第2章 タスマニア到着	7
第3章 タスマニア警察との出会い	8
第4章 背景	9
第5章 再びタスマニアへ	10
第6章 新しい警察学校	11
第7章 タスマニア柔道連盟	15
第8章 タスマニア合気道連盟	17
第9章 中島紘先生のレガシー	21
タスマニア州警察学校	21
タスマニア州柔道連盟	23
タスマニア州合気道連盟	24
第10章 思い出	25
Superintendent (Ret) Col. Fogerty (Tasmania Police Academy)	
コール・フォガティ (タスマニア州警察学校長)	25
Paul Fox-Hughes (University of Tasmania Aikido Club)	
ポール・フォックス・ヒュージェズ(タスマニア大学合気道クラブ)	26
Robert Wedd (Hobart PCYC Judo Club)	
ロバート・ヴェッド(ホバート市警察・青少年市民柔道クラブ)	27
Bill Hart (Nakajima Judo Club, Dunedin New Zealand)	
ビル・ハート(中島柔道クラブ、ダニエーデン市、ニュージーランド)	29
Maurice Appleyard (Kodokwan Judo Club, former President of the TAJU)	
モーリス・アップルヤード(タスマニア講道館柔道クラブ)	30
Dr. David Matsumoto, Prof. of Psychology (San Francisco State University)	
デイビッド松本教授(心理学博士、サンフランシスコ・ステイト大学USA)	32
Peter Stefaniw (Clarence PCYC Judo Club)	
ピーター・ステファニー (クラレンス警察・青少年市民柔道クラブ)	34
Dr. Michel Brousse (Prof. of Sports Science, University of Bordeaux, France)	
ミシェル・ブルース教授(スポーツ科学博士、ボルドー大学、フランス)	38
Michael Picken (Yamada Judo Academy, Melbourne)	
マイケル・ピッケン(山田柔道アカデミー、メルボルン)	39
Kazushi Ito (Principal of Ichinoseki Daito Junior High School, Japan)	
伊藤一志(岩手県一関市立大東中学校校長)	41
Rod Warrington (Rokeby Police Academy)	
ロッド・ウェリントン(ロクビー警察学校)	43
Bronilyn Smith (University of Tasmania Aikido Club)	
ブロンリン・スミス(タスマニア大学合気道クラブ)	45
Susumu Nakazawa (Vice-Principal, Private Correspondence School, Japan)	
中澤 進(茨城県翔陽学園土浦学習センター副校長)	47
Paul Scambler (Launceton Aikido Club)	
ポール・スキャンプラー (ローンセストン合気道クラブ)	49
Timothy Waters (University Judo and Aikido Club)	
ティム・ウォータス(タスマニア大学柔道・合気道クラブ)	50
第11章 中島紘先生の経歴	55
第12章 タスマニアという行先	57
謝辞	58

## 序文

今回の主人公であるタカという人物は、本名は中島<sup>たけし</sup>泰であるが人々から愛称であるタカと呼ばれていることを前置きしておきます。

この本を作成するに至った経緯は、タカが国士舘大学を今年で定年退職することで記念のイースター柔道キャンプを再開するので、タカがタスマニアで過ごした時期について本編を作成することにした。始めは簡単にできると思い、喜ばしいことだと答えたが、しかし、中島泰先生が日本へ帰国してから早や30年以上が経ち、公的な資料が殆ど手に入らないため、タカがタスマニアに滞在した時期に彼と交わった方々の思い出話を基にして本書を編集した。当然、人間の記憶と事実と多少異なる場合もありますが、但し、本書の作成に至って多くの方々の思い出話は事実へのリードとなりました。多くの方々のご支援を頂いたおかげで、タカがタスマニアでの滞在期間中、彼が警察学校での訓練、柔道と合気道の貢献についての記録を集めることができました。

本書は主に皆様から頂いた思い出話を基にした資料、特に現在の警視總監ダレン・ハイン氏 (Darren Hine) のタカについての警察記録、またロバート・ウェッド氏 (Robert Wedd) 自宅に訪れた海外からお客様等を記録したハウスダイアリーと、モーリス・アップルヤード氏 (Maurice Appleyard) とパット・ラッフアティー氏 (Patt Rafferty) の柔道ノートは貴重な資料となった。私自身の記憶にもかなり良い情報が残されていましたが、モーリスとロバートの記憶の詳しさとは比較になりませんでした。モーリスは、特にタスマニア州柔道連盟がタカをタスマニアに誘致する件で行った活動についての記録が詳しく、ロバートは名前と月日を細かく明記されていた。私の要望に答えて、多くの方々から情報と写真を数多く頂きました。残念ながら、全ての写真を本稿に入れる事は不可能でした。自分の写真が使われなくて、がっかりしている提供者もおられるかもしれませんが、ご理解下さい。

そして、タカを初めとし読者の皆様にはこの数十頁を楽しんで読んで頂けるように心より祈念しております。本書を読む内に昔の映像が戻り、忘れられた日々を再び生き帰らせる事になるでしょう。本書は特別だと思っております。特別な人の話を語っている本なのです。

TJW ティモシー・ジェームズ・ウォタース (Timothy James Waters)

2013年12月

## 第1章 はじめに

1970年、ニュージーランド・クラストチャーチ市の主要な武道指導者の一人である、Mr.ジョン・ボニフェス(John Boniface、以下「ジョン」にする)氏が、アジア圏内で初めて開催される「万国博覧会」いわゆるエキスポ70年に武道の本場である日本にやってきたことからこの物語が始まります。ジョンは京都のある観光会社に籍を置き仕事と武道修行に励んだ。来日前、ジョンはクラストチャーチ市のある学校の保健体育の教員と、柔道と空手道の強い実績を持った武道の愛好者であった。また、古流柔術にも強い関心を持っていたことがきっかけに、帰国後の1971年、クラストチャーチ市において「富士流護身道柔術協会」を設立した。組織の名は「富士流合気術」に由来しており、この「富士流護身道」は国士館大学の武道教授であった菅原月洲師範が晩年になって開設した組織である。



写真1 菅原月洲師範

来日したジョンは直ちに、京都市下賀茂神社境内にある青少年育成の殿堂「正武館」道場で武道に励んだ。そこで本篇の主人公のタカと友人関係を結びその関係で更にジョンはタカの先生である菅原月洲師範の指導の下で武道に励んだ。菅原月洲先生は国士館大学の武道教授で、合気道、居合道、柔道、空手道や柔術の経歴に優れた武道家であり講道館で柔道を学び、講道館柔道の創始者嘉納治五郎師範とも交流があった。また合気道の創始者植芝盛平翁の高弟でもあり、後に植芝盛平先生ご一門とも親しい関係を持つことが出来た。

中島「タカ」はジョンが来日した時は、既に国士館大学を卒業し大阪市立の中学校の体育教諭と大阪城内にある「修道館」および京都の「正武館」道場にも指導をしていた。タカは若い優れた武道指導者の一人で、体育教育、柔道と合気道のすぐれた能力を持っていた。タカは菅原先生にジョンの指導と面倒を見る様に頼まれた。

ジョンが京都「正武館」道場で武道修行一ケ年が終え、帰国する直前にジョンはタカと一緒にニュージーランドへ来ないかと？クラストチャーチ市で一年間を過ごすように誘った。タカは帰国後の先が見えなくても、海外に行く魅力を強く感じ、ジョンの要望に応じることにした。そしてタカはニュージーランド大使館に行き訪問ビザを取得した。ニュージーランドにおいて滞在した期間中、ジョン・ボニフェス氏はタカのスポンサー（保証人）となった。<sup>1</sup>

タカは1971年4月16日<sup>2</sup>にクラストチャーチに着き、12ヶ月間ジョンの両親のビルとドット・ボニフェス夫妻の家にホームステイすることになった。タカはボニフェス夫妻と親しく「デッド」（父ちゃん）と「ママ」（母ちゃん）と呼ぶことにした。タカはジョンのクラストチャーチ国際柔道アカデミークラブと更に南の方のダニーデン市の



写真2 ジョン・ボニフェス

YMCA柔道クラブにおいても柔道と合気道のクラスを指導することになった。ダニーデン市で指導した時にジョンの友人のビル・ハート氏（ダニーデンYMCA柔道クラブの先生）はタカを案内し、色々と面倒を見ることになった。

しかしタカがニュージーランド滞在中に、Mr.ブルース・フェガン氏が指導するオーストラリア・シドニーの「武士道柔道クラブ」チームがニュージーランド南島、ダニーデン及びクライストチャーチに遠征した。



写真3 ジョン・ボニフェス氏（右）とビル・ハート氏の真ん中に座っているのがタカの姿、クラストチャーチインターナショナル柔道クラブ、1972年

この時に、武士道柔道クラブの選手がタカと練習するチャンスがあり、この出会いをきっかけに、ブルースはタカをシドニーへ誘致した。結果として、タカは1972年4月にシドニーへ移籍することになった。

シドニーに来てから数ヶ月後、タカは武士道柔道クラブのチームとオーストラリアの南部へ遠征し、タスマニア州を訪

れた。タスマニア遠征は、武士道柔道クラブの選手がオーストラリア全国選手権大会等に向かっての試合に近い練習と地域の試合に出場できる環境を提供する目的で行われた。（強化遠征）この遠征を機にして、タスマニアの柔道界は初めて才能と人格の両面で優れた中島先生と出会った。

遠征直後、オーストラリア全国柔道選手権大会がシドニーで開催され、当時のタスマニア州アマチュア柔道連盟<sup>3</sup>の会長モーリス・アップルヤード氏も参加した。

モーリスはタカの実力を認め、タカがタスマニア柔道のための価値と可能性を見て、タスマニア州アマチュア柔道連盟にタカを滞在期間残り6ヶ月指導者として誘致することを連盟に提案した。モーリスは、連盟の役員のロバート・ウェッド氏（Mr. Robert Wedd）とティム・ウォタース氏（Mr. Tim Waters）の応援を得て、タカとブルー

<sup>1</sup> ジョン・ボニフェス氏は1992年に49才の若さでニュージーランドで亡くなった。ボニフェス氏は武術、武道と特に柔術についての知識が幅広く、その普及と理解に貢献した。死亡後、彼が開始した富士流護身道柔術協会において様々な変化が起こり、スタン・タイラー氏は最初の継承者となった。タイラー氏の引退後の2000年に富士流護身道柔術のシステムがクラストチャーチ市のクライトン・コパーズ・ユース・クラブの師範ポール・レーティ氏に継がれることになった。

<sup>2</sup> タカとジョンは1971年3月20日に神戸港から貨客船「北星丸」（ノーザン・スター丸）でニュージーランドへ渡航した。

<sup>3</sup> タスマニアアマチュア柔道連盟が後にオーストラリア柔道連盟加盟のタスマニア州柔道連盟になり、その後、柔道タスマニア有段者会となっていた。





写真4 ティム・ウォータス氏(左)と  
ジョン・ボニフェス氏、クラストチャー  
チ、1990年

ス・フェガン氏と相談し、タカ自身も最後の6ヶ月間をタスマニアで過ごしたいという希望を表した。

オーストラリア全国選手権大会においてブルースはモーリスに声をかけた。ブルースによれば、元々、武士道柔道クラブはタカを1年間面倒を見るつもりでいたが、クラブ側からは様々な理由で6ヶ月契約で十分だという最終的な判断になった。また、シドニー地域の別のクラブに頼んでも雇うことができないため、タカを後り、6ヶ月間タスマニアに移籍するという結果になった。<sup>4</sup>

タカは就労ビザを持っていたが、ブルース・フェガン氏と入国管理局のアドバイスを受けて、スポンサーがある上に、正式な仕事があるということが滞在延長の条件とさ

れた。また、ビザの滞在期間が過ぎて入国管理局は更新を断ったという複雑な状況にもなった。しかし、当時タスマニア州観光・入国管理局に勤めていたモーリスは同僚の入国管理局部長のグレッグ・ハニー氏と相談し、ビザの問題を解決する方法を考えた。

コモンウェルス入国管理局にビザの更新を申請交渉した結果としてスポンサーと自給自足の職業があることを条件としてビザの更新が認められ、滞在期間が6ヶ月間延長された。これでタカをホバート市へ移籍するための道が開けた。

しかし、反対した声の一つあった。この反対者は、当時タスマニア州の最も段位が高い有段者で、タスマニア州柔道連盟技術委員会の委員長ジョー・クレッセンズ氏(Mr. Joe Claessens)であった。クレッセンズ氏は、ホバート市YMCA柔道クラブの師範で、ムナー市講道館柔道クラブも指導していた。役員のクレッセンズ氏によれば、「タカの採用は不要だ。」その理由はモーリスがクレッセンズ氏に相談せずにタスマニア州柔道連盟とタカの採用に関する交渉に入ったことが、これがタカの採用に反対した原因となったかもしれない。しかし、地域の柔道クラブの賛成があり、特にジュニアの会員が多いクラブの応援があったおかげで、タカを採用する計画が進められた。

ジョー・クレッセンズ氏には良く知らなかった状況だったかもしれないが、ビザの問題もあり、緊急な行動が求められた。タスマニア州入国管理局より「中島氏は正式にスポンサーに支援され、自給自足の就職がないと、即時にオーストラリアから出なければならない。」という指令が出された。その様な理由で、必要な収入がなくても、タスマニア州柔道連盟は条件とされた就職と宿舎を準備することを正式に表明した。条件が十分に満たされたため、入国管理局はタカのタスマニアへの移動が認められることになった。

<sup>4</sup> 武士道柔道クラブの高段者で、クラブの強豪者の中でタカを乱取り稽古練習中に投げるのがたまたまできた実力者がいたが、高段者でも寝技においてタカにはほとんど勝てなかった。体格の差にも関連する投げ技勝負での強さを判断基準にしてタカのクラブへの貢献に疑問があり、契約の継続は不要という声もあったが、契約を更新しないというのは考え方が狭く短絡的な判断だった。最終的には、武士道柔道クラブの損失となり、タスマニアの柔道の利益となった。しかし、武士道柔道クラブの判断には経済的な理由もあったかもしれない。

## 第2章 タスマニア到着

タカは1972年10月にタスマニア州のホバート市に到着した。ホバート市のレンスダウン・クレセント125番のアパートがタカの宿舎として用意された。また、ニュー・ノルフォーク・柔道クラブの会員のジョージ・サロン氏の紹介を通じてホバート市北部郊外のオースティーンズ・フェリー町にあったディボン（ヌーサリ）という植木屋においてタカの就職も提供され、タカは植木屋の助手として勤めることになった<sup>5</sup>。これで、連盟の経済的な負担が軽減されることになった。モーリスはタカに宿舎と就労を提供した。

タカはほぼ毎晩柔道か合気道の指導をしていたが、指導先への移動は送り迎えとなり、彼には自由に使える自動車も交通機関がなかった。タスマニア州に来る前は、仲間に囲まれ賑やかな生活を過ごしていたタカにはアパートでの一人暮らしは寂しく、近所にも面白いところがなかったので、数週間後にレンスダウン・クレセントのアパートから出て引越しすることが決められた。アパートの家主は親切な方で、タカの状態を良く理解し、別料金を要求せずにタスマニア州柔道連盟を賃貸契約から放すことにした。タカはロバートとブロンウェン・ウェッド夫妻に誘われて、ウェッド夫妻のロース・ベイにある自宅へホームステイし、5ヶ月後の帰国までウェッド夫妻と共に過ごすことになった。

タカは植木屋での仕事を楽しんでいて、全ての課題を熱心に対応したが、ミミズが怖いと自認していた。タカはどうしてもミミズを触れませんでした、これは植木屋の助手として大きな弱点であった。一緒に働いていた仲間に「逞しい武道家なのに、小さなミミズが怖い。」とよくからかわれていた。タカは、様々な処で、靴や手袋等にくっ付いているミミズの姿を見ただけで、..? 恐怖を感じた。



写真5 投の形より浮落を演ずるタカの姿。

まもなく、タカには数多くの友人ができ、今日まで連絡を取りあっている親友の数は少なくありません。多数の仲間ができて、多くの人々に面倒を見ていただけることになった。送り迎えされたり、ピクニックやバーベキュー、ハイキング等に誘われたり、新しくできた仲間とそれらの家族と一緒に旅行に行ったり等々。タスマニアの人々に暖かく歓迎されたタカは、タスマニアは暮らし易く良いところだと実感し、可能であればタスマニアで暮らして仕事をしたいという希望を表しました。（永住？）

<sup>5</sup> タカは気楽な雰囲気があり、夏期間にディボン・ヌーサリーに仕事をし始めた。同僚と仲が良かった。毎日お弁当持って「毎日、ピクニック」と言った。

数週間後、柔道関係者にタカは実力が高く、優れた指導能力を持っている上で、自分の知識と技能を伝える情熱もあると解ってきた。したがって、タカを長期間タスマニアで滞在することが多くの人々に賛成された。しかし、長期間の滞在を認めるビザを得るため、労働ビザが切れてから一度日本へ帰国することが必要となった。しかし、ロバート・ウェッド氏、ティム・ウォータス氏、モーリス・アップルヤード氏、三人は連盟の同僚と仲間の応援を得て、タカをタスマニアへ再び戻そうと挑戦するように決めた<sup>6</sup>。

### 第3章 タスマニア警察との出会い

ロバート、ティム、モーリスの三人は信念が強く、政府にも繋がりがあった。したがって、タカをタスマニアに再び戻って帰られる事が出来るのは、この三人しかありません。ロバートはタスマニア州警察大臣のビル・ニールセン氏との縁があり、モーリスは観光・入国管理局の中での繋がりが多く、ティムは警視総監のエリック・ノールズ氏「通称ボクサー」<sup>7</sup>と会ったことがあり、スポーツ局とのつながりもあった。当時、スポーツ局にロクビーに警察学校を新しく設立することが決定されていた<sup>8</sup>。タカは日本での教員歴、保健体育、柔道と合気道に関する幅広い知識もあり、人柄も良かったので、警察学校の最初の指導者として最適な候補者となりそうであった。後は有力者の協力を得るだけという問題だけであった。

警察大臣と警視総監警との交渉について、タカに政府の役員と警察官の前で実技演武をさせることが進められた。ノールズ警視総監は、日本の武道が警察の護身術として役に立てるかどうかという疑問。ノールズ氏は警察官が逮捕術として人を殴る等はしてはいけないという進歩的な考えを持っていた。また、ボクサーとしての背景がありながら、ノールズ氏によれば、ボクシング等の格闘技は警察の護身術として時代遅れであり、またノールズ氏は、武道が空手のような殴ったり、蹴ったりする等の格闘技と思っていたらしい。タカはノールズ氏の疑問に対して上手く対応することができた。

ロバートとティムはタカと警察や政府の間での会議を設け、この会議においてタカは護身術の解説と実技演武を行うことが計画された<sup>9</sup>。タカは実技演武と解説、関係者の質問に上手く対応した。後に警察学校長となったキーズ・ヴィニー氏<sup>10</sup>を含めて観

<sup>6</sup> ティム・ウォータス氏は豪州柔道連盟タスマニア支部のシニア会員で、当時大学で柔道の指導を行い、彼が一年前に新しく大学に導入した伝統的な合気道も教えた。タカの以前の武士道柔道クラブとの訪問で、ウォータス氏はタカの合気道に関する幅広い知識と実力を知っていた。この合気道は大学で実現されるようになった。したがって、タカは柔道と合気道の普及と発展の両方に大きく貢献できることが明白に解った。これでタカがタスマニアでの滞在するための道が開けた。

<sup>7</sup> ノールズ氏は若い頃にボクシングの実力者だったので、ボクサーという宛名が付けられた。正式に警察長になったのは、1974年のことだった。1977年に勤務中に死亡した。その後にマウス・ロビンソン氏が警察長官として継がれた。ロビンソン氏は1988年に警察長官として定年退職した。

<sup>8</sup> 警察学校の建設は1975年に完了できたが、オーストラリアの警察学校のため建設された施設としては初めてだった。

<sup>9</sup> 会議がホバート市のリバープール通りとアルガイル通りの曲がり角にあった警察学校で開かれた。施設には大きいホールがある建物からなり、元々ホバート市YMCAが使用した建物だった。



客には強い印象が残った。タカの無駄がなく落ち着いた護身術へのアプローチに感動させられた。会議の直後、ヴィニー警察学校長はタカの採用に応援したいと表し、警視総監警に1974年1月31日のレポートに「タカ中島を警察学校の保健体育の教員として推薦できる。」と主張した。

ティムはタカがタスマニア警察学校に採用できる可能性が高くても他の計画も考えた方が良くないと思いハッチンス高等学校にもタカの名前で教員採用の申請をした。また、保健体育の理論とその実習を入れようとしていたネルソン短期大学にも申請した。また、軍隊とも会って、ホバート市軍隊訓練所の護身術と保健体育の指導員として採用されるよう申請した。

ただし、ハッチンス高等学校での教員としての採用が「不適切」という理由で断られ、ネルソン短期大学においても保健体育の採用は決定されず、申請が進められませんでした。ホバート市軍隊訓練所においても個人のレベルに利益があっても、他国民の採用は国保のため禁止され採用ができなかった。これらの計画が進められなくタカは幸運の波に乗れなかった。(エンジェルは何処に…)

タカの帰国が近づいてきた。タカは彼と出会った人々、また一緒に稽古をした人々に強い印象を残した、特に若い柔道家には人気があった。また、タカは大学での合気道にも大きく貢献し、合気道の理解と実践が深まり、強い基礎も作られた。

中島先生はタスマニアでの在留者として戻るべきことが皆なに理解された。



写真6

1973年4月、タカは日本へ帰国した。ホバートの港からシドニー港まで渡航し、シドニーから日本へ旅立った。出発日の夜は関係者がお別れの挨拶をするために港に集まった。タカはこの出発の日は非常に感情的な時間で、最後の稽古を終え、出発までの数時間を友人と飲んで過ごした。船に乗ってから皆が見えるところに行きお別れの手を振った。船の手すりに登って歌いながら手を振って日本に向かった。埠頭に立った人々は海に落ちて帰国が遅れるのではないかと心配した。でも奇跡的に事故を起こさず安全に帰国することができた。(万歳！)

## 第4章 背景

1974年5月、警察大臣はロバート・ウェッド氏とティム・ウァータス氏と会談し、州政府に中島氏を保健体育と護身術の講師として採用するという関心を示した。警察大臣は地域のテレビ番組に出演し、これからの警察官の護身術について解説と討論を

<sup>10</sup> 当時、ベルト・レーンバード氏は警察学校の校長だったが、ヴィニー氏は1975年に警察学校の校長として継ぐことになった。

行った。

タスマニア州警察と州の警察大臣の応援があっても入国管理の手続きに従って行動する必要があった。法律的な条件もあり、国内の候補者もあったので、海外の国籍を持つタカは最も適当な候補者であることを明白に示さなければならなかった。1974年7月、タスマニア州警察はティム・ウォータス氏の協力で一般公募広告の下書きを作成した。この公募広告の書類に要求された条件はタカの資格を反映したが、タカ以外に保健体育と護身術の教官として適当である候補者もいるという可能性もあった。当時、タスマニア州公務員法の中で機関による直接の採用は不可能という決まりもあった。<sup>11</sup>

1974年10月、ロクビー新警察学校の保健体育の教官としての求人広告がタスマニア州の主な新聞に発表され、契約期間が更新可能の2年間契約とされた。就職先のロクビー警察学校はこれから建設しなければならないという状況でもあった。応募期間はわずか2週間以内とされた。

そして3名の候補者が応募した。日本国籍の中島隼と斉藤正の2名に加えて地域の候補者のシュール・メューカー氏も応募した。メューカー氏はタスマニア建築協会が推薦した。海外からの候補者の両氏には平等であったが、タスマニア警察が求められた基準を達したのは中島隼のみだった。したがって、1974年11月、保健体育の教員としての就職が正式にタカに申し出され1975年1月より勤務を始める事になった。

タカの応募がイラワラ地域のアマチュア柔道協会のヘンリー・ルヴィストン氏、シドニーの武士道柔道クラブのブルース・フェガン氏達の応援もあった。タカの採用が知られるようになったが、賛成も多いが、批判する声もありデール・イーグルリング氏<sup>12</sup>もその一人であった。彼の立場によると、彼も含めてオーストラリアにおいて才能がある候補者は十分にいたので、海外からの候補者は不要と言ったが、しかし本人は申請しなかった。

## 第5章 再びタスマニアへ

1974年11月、タカは京都で出会った元柔道の教え子の岡田愛子と結婚した。結婚式は大阪城内にある「豊国神社」で挙式された。中島夫婦はハネムーンを兼、1974年12月10日に再び日本から出航し、タスマニアへ向かった。タカは日本でのすべての仕事から解放された。ロバートとブロンウェン・ウェッド夫妻はローズベイの自宅の階下部分を改装し住居として中島夫妻に一時提供した。このアパートで警察学校の官舎が用意されるまで共同生活することになった。

タスマニアの柔道と合気道の関係者はタカの帰りを楽しみして期待した。

<sup>11</sup> この法律が後に限られた範囲で機関による直接採用を認める政府業務法に替えられた。

<sup>12</sup> デール・イーグルリング氏は1970年代にタスマニア州各地においてイーグルリングテコンドー道場をテコンドー協会の下で開設した。韓国の特コンドーとハブキドーの実力者だった。イーグルリング氏は1995年5月に51歳の若い年齢でがんと闘って亡くなった。

今回、美人の妻の愛子も一緒であるが、タスマニア柔道連盟に寄付した鎧兜（複製品）を持参した。この兜がトロフィーとして、毎年タスマニアの優秀な柔道クラブに授与されることになったが、これはタカの地域への柔道に対する情熱と応援を示すものである。中島先生が持ってきた兜は中島トロフィーと名称され、大学柔道クラブに大事に保管され、道場に展示されていた。



写真7

しかし、盗まれてなくなって見付けることができなくなった。大学のオリエンテーションウィーク時になくなったと考えられる。中島トロフィーは二度と見られなくなった。（悲しい出来事です。）

当時、大学の道場は共同で使用され、少なくとも柔道以外の武術グループも道場を使用することもあり、厳重に検査の難しさも加えた盲点の一つとなった。道場の鍵を持つ人は何人もいて安全対策も厳格ではなかったことが理由である。

## 第6章 新しい警察学校

1975年1月15日から新警察学校保健体育指導員としてのタカの勤務が始まった。勤務内容は以下のものであった：

- タスマニア州警察の護身術訓練の設立に貢献すること。
- 教材を作成すること。
- 護身術の訓練について保健体育の他の教員と協力すること。
- 警察官の護身術訓練を指導すること。
- 体操、チームスポーツ、陸上競技、水泳等の指導も支えること。

タカの仕事は警察と特に警察学校内である。警察学校は当時アルジャイル通りとリバープール通りの曲がり角にあった。アルジャイル通り側にあった建物は体育館を道場として使用された。警察学校が1975年末<sup>13</sup>に新しい施設に移動されるまではアルジャイル通りとリバープール通りの曲がり角にあった。

タカの仕事は警察訓練の進化として見られ、警察の関係者と一般の人に新しい指導者（タカ）に会う機会を作るだけでなく、実技能力を見せる必要もあった。タカの仕事が本格的に始まる前に、タカがタスマニア全州の主な警察署において実技演武を披露することになった。警部補のジェラルド・フリーメン氏が自動車を運転し、ロバート・ウェッド氏は実技演武の受けとしてタカの相手をした。実技演武が上手く行ったおかげでタカの仕事が警察官の間に広く知れ渡り、多くの応援と新しい技術の重要性が認められた。

<sup>13</sup> ロクビーのタスマニア警察学校の新しい施設が1976年3月に開設された。



写真8



写真9

クイーンズタウン市での実技演武の時に少し問題が起こった？

毎回、実技演武終了後に一般の人や現職警察官がタカに質問できる機会が作られ、「こういう場合はどうすれば良いのか等」という質問が多かった。タカはこのような質問に対して丁寧に解説と実技演武を使って対応した。

タカは背が高くはないが無駄の動きをせずに相手を見事にコントロールした。質問がよく出てもクイーンズタウン市の演武までタカが相手にするケースはなかった。体格が大きい一人の警察官が席から立ち上がり、タカが立っている位置まで進み、何も言わずに突然タカを抱え込んだ、瞬間。まもなくその警察官は倒されて下からタカの笑顔を見ることになった。警察官曰く「これで私の質問が答えられた。」と言いながら立ち上がって席に戻るようになった。(シーン…)

保健体育と護身術の教員という任務はタカの警察学校での主な役割だったが、初めの頃は警察官の基礎体力の測定も含む保健体育のシラバスの作成にも力を入れた。また、経験が長い警察官と相談しながら、警察官用の護身術のシラバスも考案した。また、職場での健康と安全の向上に関しても意識が高かった。いくら危険な状態になっても、特に公開において蹴る、殴る等の打撃技は警察官には不適当とされた。警察官が使用した打撃技に関連して、米国とイギリスにおいて警察官の暴力問題となり、地域のメディアにおいて反対の声が多くなった。

タカの技法は冷静に行動することを強調し、混乱の状態を静めることを目的とした。攻撃者との接触はどうしても必要になる場合は、無駄な動きをせずに相手に怪我をさせないことが重要とされた。

このアプローチを意識しながら柔道、柔術と合気道の技法が訓練に採用され、タカ自身の経験も警察訓練に加えられた。

タカは主に警察のコーデットコース(訓練期間2年)と新人警察官(訓練期間1年)を対象にした保健体育と護身術の指導を担当したが、機動隊・海上警察・深林警察にも護身術を指導することになった。

警察学校がロクビーの施設に移動してから、警察訓練のシラバスは合理的に構成されるようになり、タカは警察訓練の主な柱となった。タカが作成したシラバスが拡大され、1976年の半ば頃になると、タカは全州警察関係者を教えることになった。

当時、警察官の訓練を担当したのは、警察長のコール・フォガティー氏だった。毎



日一緒に仕事をしながら、フォガティー警察長とタカは今日まで永く続く親友関係を作った。

ホバートに来てから22ヶ月頃、ウェッド夫妻のアパートに住んでいたタカと妻の愛子はアパートを出ることにした。ウェッド夫妻のアパートに滞在する内に長男の豪州ごうしゅうが生まれた。タカと愛子は警察学校内の住宅が第一希望だったが、警察の住宅は特別で、様々な手続きが必要となった。警察学校長のバイニー氏から警察の住宅への移動が推薦された。他に二ヶ所の住宅がタカに勧められたが、不適当として断った。最終的には、中島夫婦は1976年8月に警察第3住宅に入居し、五年後の帰国まで住居とした。ここで長女の朋子ともこと次女の桂けいが生まれた。

タカは自動車の愛好者でもあった。ニュージーランド滞在中、1938年型のモーリス8を購入した。この自動車にはメーカのプレートが付いているとタカは何回も強調した。ニュージーランドは中古自動車のメッカだった。タカは武士道柔道クラブで指導するためにニュージーランドからシドニーへ移動した時、この自動車を持ってきた。また、ロクビー警察学校の住宅に入居した時、このモーリス8はホバートまで移動した。さらに、タカは1981年に帰国した時、日本まで渡船したが、これでこの自動車の物語が終わらなかった。

この自動車は日本で目立ち、関西テレビの「どてらい男」とい西郷輝彦が出演した映画に登場した。1975年タスマニア警察での仕事が決まり考えた末、また関西テレビ局からの要望もあり、関西テレビ局に売却することにした。タカの車はその他に、オレンジ色のLeuland-Mini、VW社のゴルフ、そしてMini-CoupeとVolvo-144も含めた。

1976年1月、タカは技術向上のため、また家族に会うために、日本へ一時帰国する事になった。1977年1月の末に妻の愛子と長男の豪州を連れて日本へ旅立った。旅の目的は全て達成した。

警察長のマックス・ロビンソン氏のレポートによると、タカは「特にコーデットと警察官全体の基礎体力を高め、タスマニア警察学校の優れた指導者」だった。また、在日オーストラリア大使館のジェームズ・プリンソル大使は「中島氏は日本の優秀な代表者として日本とオーストラリアとの間にあった先入観の決裂に貢献した。」と報告した。(第二次世界大戦！)

タスマニア警察の記録によると、タカの指導のレベルは高く、生徒の関心を引き、自己訓練の要求にも対応した。また、タカの影響は非常に「積極的」で、生徒に明確にモチベーションを付ける、結果として彼らに肉体的な追突に対応できる自信が付けられた。



写真10



写真11

タカは周りの人々のインスピレーションとなり、個々人が練習において自分の限界を超えて、自己のベストを達成できる刺激を与えた。タカが考案したシラバスと彼が行った指導法が現在もほぼ同じままで継続され、彼に続いた継承者2名を越えて40年が経った現在も警察学校の保健体育と護身術の訓練の基礎となっている。タカは警察の関係者に高く評価され、広く尊敬された。彼の名は今でも警察学校の卒業生の間に伝説として知られている。

タカは保健体育へのアプローチとしてまず生徒の基礎体力を作ることを中心とした。そのため、競走、水泳、バランスが良い栄養、ジム・トレーニングと多種のスポーツ活動からなるプログラムを実施した。また、体力測定の制度を導入し、保健体育の教科課程の改良にも尽くした。

警察学校で仕事を始めて数ヵ月後、タカ\*は警察学校内での柔道クラブの設立を提案した。この計画が広く同意され、上官の応援も得られた。結果としてアカデミー柔道クラブが開設された。特にフォガティー警察長は警察柔道クラブの設立を応援した上官だった。指導者としてタカの継承者である竹村俊之\*\*氏(国士館大学卒)、松永義雄\*\*\*氏(東海大学卒)が1995年まで継続した。松永氏が帰国した2010年で警察学校柔道クラブに関する記録が全て消滅された。

(\*中島タカ：1974年～1981年)

(\*\*竹村俊之：1981年～1985年)

(\*\*\*松永義雄：1985年～1995年)

警察学校の柔道クラブは徐々に強くなり、警察関係者だけでなくその家族も入会し、タカは師範と監督として指導した。タスマニア州の強い選手はタカの生徒になり、クラブで一緒に練習することになった。新しいクラブの正式な会員になった強化選手の数も少なくなかった。タカは警察に限らずタスマニア州の柔道愛好者全体に良い影響を与えた。

1979年11月、タカは監督として警察クラブの選手団をキャンベラで開催された全オーストラリア柔道選手権大会に参加した。本大会は1980年のモスクワ・オリンピックの選考会でもあった。タスマニア州柔道連盟はタカを監督として、選手団を派遣した。応援したおかげでアカデミー柔道クラブの選手は非常に良い成績を残し、以下のメダルを獲得した。

金メダル：Miss Vivien Burk (ヴァジニアー・パーク)

銀メダル：Mister Michael Briers (マイケル・ブライア)

銅メダル：Mister Michael Stanfield (マイケル・スタンフィールド)

チームが選手権大会から帰ってきた時に、警察庁長官ジャック・ジョンソン氏が選手の成績を評価し、後にレポートの中にも選手団の成功を高く評価した。

1981年、タカの長男の豪州が小学校に入学する年齢が近づいてきた。したがって、豪州と姉妹がこれからどういう学校教育を受けさせるべきかは、重要な問題となった。



写真12 辻野氏、タカ、タスマニア州知事ジェームズ・プリムソル氏、森脇氏、竹村氏

オーストラリアの教育制度か日本の教育制度か。どこで教育を受けさせれば良いかという問題となった。両方ともプラス面とマイナス面があった。

そんな時1980年4月、タカの母校である国士舘大学の柴田梵天総長が訪豪され、結果タカに「帰国するように要請があった。」色々考えた末、タカと愛子は総長のお言葉に応えるべく、近い内に日本へ帰国することを決心した。

滞在7年、タカは警察の訓練に大きく貢献し、警察官訓練の将来の基礎と方針を設定したので、ほかの指導者でも継続できる基礎を作った。帰国する理由としては、第一に、子供を日本文化で育てること。もう一つは、愛子は晩年に病弱の母のことを心配し、母の側に戻りたかったことも。

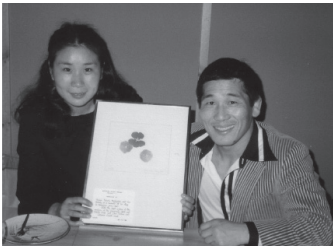


写真13 大学合気道クラブ

帰国が決定され、出発は1981年に計画された。

1981年8月末、タカは家族と帰国することになった。タカを知っている人々は帰国のことについて大変落胆し、様々な送別会が開かれた。関係者の多くは寂しい気持ちが残ったが、タカはいつか戻ってくることを約束した。

## 第7章 タスマニア柔道連盟への貢献

タカは1972年に初めてタスマニアを訪問してから、彼の柔道に対する実力と指導者としての能力を証明した。タカの技術や指導法、情熱と人格はタスマニア柔道界に高く評価された。彼はアカデミー柔道クラブで活躍し、長期間にわたってタスマニア州の在住者として残ることになったので、タスマニア州の柔道は新しい段階に入った。

タスマニア州の数多くの選手がタカのクラスに参加し、各州の代表チームの強化選手として選考される強い選手が集められた。タカの実力は柔道界の刺激となった。

タカの柔道に対する指導能力は非常に高かった。投げ技は綺麗で、スムーズに、技術的に正確だった。また、彼が指導中に行った演武と解説と生徒に対する個人の技術指導は抜群の才能を示した。しかし、最も目立ったのは、彼の寝技だった。タカは背が高くないので、選手時代は実力がほぼ同じであって、彼より背の高い相手に対して畳に引き込み寝技で勝負する場面が多かった。したがって、試合に勝つには寝技で勝負するしかなかった。特に逃げ方と返し技においてはレベルの高い技術を身に付けていた。タカと乱取り稽古をした柔道家は彼の能力を高く評価した。彼の寝技の逃げ方と返し技は信じられない程だった。ホーディニーも感動するくらいだった。ホーディ

ニーとは、世界中に有名なマジシャンとして知られていたハンガリー生まれのエリッヒ・ワイス（1874-1926年）のステージネームだった。タカの指導と幅広い経験はタスマニア州の柔道の力となった。

タスマニア州の柔道のレベルを向上させるための作戦の一つとしてタカは地域の柔道家がオーストラリア全国各地の選手と交流や柔道に関する知識と技術の交流ができ、柔道の交流を通じて友達も作れる場を作ることにした。これがイースター柔道キャンプの誕生となった。このキャンプは1976年に第1回が開催され、毎年行われることになり、タスマニア州全土で人気になり、広く応援されるようになっていった。イースター柔道キャンプが口コミで広く知られるようになってから、参加者はオーストラリア全国から集められ、メルボルンに在住している日本人の先生が生徒を連れて参加するようになった。1979年、1980年に仲澤進氏（旧姓：高寺）と伊藤一志氏が参加者した。これも話題になった。（両氏は、日本体育大学卒の先輩と後輩であった。）

1976、7年のキャンプはホバート市北部スコット通りベルリーヴにあった旧クラレンス警察署青少年市民クラブのホールで開かれた。この施設は1978年に崩壊され、1979年に新しく建築され、こん回の会場となった。ホールという名でも知られていた旧施設は元カトリック教会に関連した高等学校（Corpus Christi School）が使用した建物だった。

1978年以降のイースター柔道キャンプはロクビー警察学校で開催されるようになった。タカの帰国以降、イースター柔道キャンプをタスマニア州のメインイベントとして継続することが段々と難しくなってきた。これは、タカの後に続いた指導者はイースター柔道キャンプの開催を優先せず、また参加者も年齢を重ね選手として引退、また家族に集中した人もいた等に関連する。

1984年になると、タカが考案したイースター柔道キャンプは消滅しかかったが、1985年にメルボルンのアサー・モースヘッド氏がイースター柔道キャンプを再開し、9年間継続した。アサーは1978年に初めてタカと出会い、1981年のタスマニア州最後のイースター柔道キャンプにも参加した。

アサーのメルボルン市コールフィールド柔道クラブは1985年のイースター柔道キャンプをメルボルンで開催し、1986年から1992年にかけてはキャンプがアサーが指導していたブレントウッド柔道クラブで主催され、1993年と1994年は再びコールフィールド柔道クラブで開かれることになった。そして1994年のキャンプが最後となった。初期のアサー主催のキャンプにはタスマニア州の選手も参加したが、徐々に彼らの数は少なくなっていった。

イースター柔道キャンプはオーストラリア柔道界のメインテイング・ポットとなり、柔道の主なキーイベントの一つとして広く評価された。タスマニア州以外の各地と海外の選手も参加したおかげで地域の選手が全国レベルの大会以外ではほとんど体験できない技術と戦術と出会うことができた。



タカの方針の下で、イースター柔道キャンプはタスマニア州の選手育成と強化チームの結合にも重要な役割を果たした。イースター柔道キャンプは選手同志が交流ができ、地域の選手の絆を作る場となった。また、タカの基礎体力作りを強調する方針のおかげでタスマニア州の選手が全国選手権大会において最も体力的に強いチームの一つとして知られるようになっていった。



写真14

イースター柔道キャンプは地域のクラブが試合以外の環境で交流ができる場として各州各地域の選手のスキルを向上し、チームとして団結する刺激となった。1980年代前半、6年間に渡ってタスマニア州のチームは数多くのメダルを獲得し、他の州の監督に高く評価された。しかし、競技成績よりもタカがタスマニア州で活躍した時のイースター柔道キャンプは全オーストラリアの柔道家の絆を強めた。

写真14に1977年第2回目のイースター柔道キャンプの参加者が見られる。この写真はベルリーヴェにあったクラレンス旧警察署の道場の前で撮影された。参加者の中にはマイケル・スタンフィールド、アンディ・ウィットル、ケリ・ウェーカフィールド、ジョン・ディーコン、フィルップ・マクドーマット、スティーブン・スミス、マイケル・ブライア、クリス&ピーター・テイラー兄弟、等々の全国選手権大会で好成績を残したタスマニア州の強化選手たちとメルボルンの仲澤・伊藤両先生の顔が見られる。

タカの滞在中に全国のタイトルを獲得した選手の中にヴァージニア・バーク（1979年、女子-72キロ級）とスティーブン・スミス（1981年、男子-60級）がいた。スティーブンは後にタスマニア州最初の選手として世界大会の代表選手となり、1981年オランダ（Maastricht）の世界柔道選手権大会のオーストラリア代表選手として選考された。他にナショナルチャンピオンでタカの影響を受けた選手が何人もいた。中には、1984年の無差別級のタイトルを獲得したマイケル・ブライアと1980～1990年代に様々な大会で各階級のタイトルを獲ったディーン・ランプキン、クリス・テイラー、とクリス・パーマーがいた。ディーン・ランプキンは2000年ブラジルの世界柔道選手権大会のオーストラリア代表選手として選考され、彼はタスマニア州最初の世界ジュニアの代表選手にもなった。タカが指導したタスマニア州のチームが1982年にパースで開催されたオーストラリア柔道選手権大会において優秀な成績を残し、マイケル・ブライア、ピーター・テイラーとスティーブン・スミスは銀メダルを獲得し、カロリン・ウィスビは銅メダルを獲得した。

## 第8章 タスマニア合気道連盟への貢献

タカは1972年に初めてタスマニア州に来てからタスマニア州内での合気道の実力者

及び指導者として知られるようになった。日本にいた時から柔道、合気道と居合道の経験がある武道家として高く評価され、富士流護身道の創始者菅原月洲師範が国士館大学で武道教授として指導した優秀な卒業生の一人だった。タカは菅原師範に1970年に日本に武道修行に来ていたMr.ジョン・ボニフェス君の指導を頼まれた程、菅原師範に高く評価されていた。

タカは1975年にロクビー警察学校で働くためにタスマニア州に戻ってきた時、ティム・ウォータス氏にタスマニア大学道場での合気道の指導と師範を頼まれた。ティムは当時、大学の柔道と合気道クラブの会長だった。タカはアルガイル通りの警察関係の施設において合気道のクラスを指導した。ロクビー警察学校の開始後も警察の道場を使って合気道のクラスを開いたが、大学の道場にもクラスと昇級昇段審査が行われたこともあった。大学関係者の指導においてタカは富士流の伝統的合気道に従って指導したが、警察官の訓練にも合気道の技法が採用された。警察学校の生徒とアカデミー柔道クラブの会員の中で合気道の技法への関心が高まると、タカはアカデミー柔道クラブの中で合気道の指導を行う時もあった。結果として警察学校の関係者と柔道クラブの会員の中で大学合気道クラブに入部した人もいた。

初めてタスマニアに来て半年程経過した時、タカは大学において合気道クラブの指導を担当した。将来長期間に渡ってタスマニアに滞在する可能性もあって、審査会を開くことを提案した。1973年1月、合気道クラブに正式に昇級昇段審査会を計画した。そのため、審査を受ける候補者は富士流護身道に登録し、タカは菅原月洲師範の代理として審査会を行うことにした。合気会の級・段位を持った会員がいても、当時大学合気道クラブは、合気会の組織や連盟に加盟していなかった。したがって、富士流護身道との登録が可能になった。おかげで大学合気道クラブは新しい段階に入った。

1973年2月に最初の富士流護身道の審査会が開催されることになった。また、タカが帰国した直前の3月に第二回目の審査会も開かれた。最初の免許状が富士流護身道宗家「ゲッシュー・イチジョーアン」の名で発刊され、タカのサインも載せられた。後に発刊された免許状においてタカが所属した富士流護身道という組織の宗家の名が「ゲッシュー・スガハラ」とされたが、この書き方の違いはローマ字への転写の方法に関連していた。タカが考案したシラバスはどうか臨時的な内容だった。タカはタスマニアに戻ってくる望みがあったが、本当に戻ってこられるかどうかというのは、当時はまだ解らなかった。色々考えて、タカは合気道の生徒にこれから進める方針と彼に継承できる実力が高い生徒のグループを残したかった。したがって、タカが行った審査会は技術の基準を示す上で、これから新しく入ってくる生徒を指導する役を持つクラブの先輩の刺激にもなった。(指導者養成)

1972年、タカは北タスマニア州のローンセストン市警察と市民の合気道クラブの合気道の指導者と会うためにローンセストン市へ向かった。彼らはタカと出会う機会とこれからの可能性に歓迎した。タカが初めてローンセストン市を尋ねた時、合気会の

会員だったピーター・ヨースト先生も参加し、タカの実力に感動した。

ローンセストン市警察と市民の合気道クラブの会員も1973年2月の審査会に参加した。結果として大学合気道クラブとの絆が作られ、両方のクラブは富士流護身道の正式な所属団体ではなくても海外の所属団体として扱われ、タカが審査の方法をアレンジしたおかげで級・段位の免許状の発行と登録も可能となった。

タカは1973年に帰国以降、大学合気道クラブはタカが開始した合気道の方針を続けた。タカは1974年の末にロクビー警察学校に勤務するために、タスマニア州へ再び戻ってきた。彼が指導した合気道の基準が残され、次のレベルへ進むことができた。稽古の正式なシラバスと審査の評価基準は主な課題となった。タカが新しく考案した合気道のシラバスは構成が良く、幅が広く、オーストラリア、ニュージーランドとオセアニア各地域の富士流護身道の道場での指導の技術的な基礎となり、今日まで残っている。タカがタスマニア州警察で任務し、彼の長期間の滞在も確実にされたので、合気道の指導が高いレベルで継続できることも確かめられた。

1976年の春に最初のイースター柔道キャンプが計画されると同時にタカは大学合気道クラブの生徒にも合宿を提案した。集中的に稽古と交流ができ、合気道界の絆を強める機会にもなると望んだ。タカの提案に従い、最初の週末合宿が計画された。1976年2月に、タカを責任者並びにリーダーとしてこの合気道のキャンプが大学柔道と合気道クラブの主催でセブンマイルビーチにあったユナイティングチャーチキャンプと会議センターにおいて開かれた。大学の柔道と合気道クラブのOB・OGも招待され、後のキャンプにも参加出来ることになった。このキャンプは金曜日の夕方からキャンプ場の設備、晩御飯と夜遅くまでの合気談話（講話）とした。練習は翌日の朝トレーニングで始まり、海岸まで走ってから朝食。休憩後、午前、午後の稽古があり、夕食が終わってから合気談話が続いた。日曜日のスケジュールは土曜日とほぼ同じだったが、キャンプは日曜日の夕方に解散となった。

セブンマイルビーチの施設に宿泊所と野外のミーティングエリアがあり、施設の本館に台所があった。給湯機で暖めるまでなかなかお湯が沸かなかった。ミーティングエリアが道場とされた。アルガイル通りの旧警察学校から限られた数の体操マットを借りて、道場とされたミーティングエリアにあった野外炉がマットで覆われる位しかなかった。現在の安全規則の基準に応えない状況だったと記憶している。

タカは施設と道場の広さについて心配していたが、参加者と同じ位い楽しさを感じ、満足した。この最初のキャンプは良い出発点となった。タカは合気道キャンプを2月か3月と9月か10月の期間を使って年2回開催するという計画に賛成した。このキャンプは年間のイベントとして確立され、25年間継続された。

その後、1978年1回目のキャンプを例外に、年2回の合気道キャンプの会場がモントゴメリー公園ユースキャンプと会議センターに移動した。モントゴメリー公園ユースキャンプと会議センターの施設は最初の会場セブンマイルビーチより環境が良く、

お湯はそのまま蛇口から出てきた。最初、マットの数が少なく、道場の広さが狭かったが、センターの体育館が完成され、大学は柔道用の畳を購入したおかげで、体育館の床がほぼ完全に覆われる程十分な道場ができた。カニングハムの施設が使えるようになってから合気道キャンプの設備が徐々に改良され開催できるようになった。合気道のキャンプがローンセストン市とニュージーランドのクラストチャーチ市の合気道関係者にも興味を持たれ、合気道のイベントとして徐々に広く知られるようになっていった。

合気道キャンプが大学柔道・合気道クラブに支援と主催され、クラブの年間スケジュールの主なイベントとなった。

1981年のタカが帰国するまでタカはほぼ全てのキャンプを指導し、合宿の最後の日には審査会を開いた。

1978年、タカはクラブの会長と相談し、富士流護身道のオーストラリア支部の設立を提案した。

大学柔道・合気道クラブもローンセストン警察・市民合気道クラブも当時加盟される統括組織がなかったため、タカの提案が広く応じられた。ティム・ウォータス氏は規約の下書きを作成し、1978年11月に日本傳富士流護身道豪州支部が正式に設立されることになった。タカは大学の道場を組織の本部にすること及び自分で組織の行政に関連せずに技術委員長として任務することを提案した。

新たに設立された組織の加盟団体の数が徐々に増え、1988年にローンセストン市警察・市民合気道クラブとクラレンス市警察・市民合気道クラブが加盟し、1993年にニュージーランド・クラストチャーチ市のカンターベリー合気道クラブとサモアのアピア合気道クラブも加盟団体となった。



写真15 タスマニア大学の合気道・柔道クラブが主催した第一回合気道キャンプの写真（セブン・マイル・ビーチ、1976年2月）

創始者の菅原月洲師範と同じように、タカ自身は政治とポリシーを武道に入れることについて反対した。タカにとって武道は誰でも参加できるもので、誰でも、何かに貢献できるものと信じていた。タカは、技は一つの方法に限らず技術の原理と理想に従うと、様々な方法があるという観点を持っていた。

1980年代後半に入ると、タカとティム・ウォータス氏は国際電話での会話と手紙での交換をしながら色々相談をして大学には新しい

道場が必要という問題について同意した。

三菱会社等の主要の企業を頼んで道場を寄付する計画になった。当時、三菱会社には海外において支援活躍を行う方針があった。タカは日本で三菱会社と連絡し、ティムはタスマニア大学の副学長と相談した。三菱会社は道場に会社の名を付けることを条



件にして施設を寄付することに賛成した。少なくとも施設内に会社の貢献を示す飾り板を付けること及び贈呈式が必要とされた。また、施設の建設は大学の責任となっても会社は建築の設計図に携われることを望んだ。副学長は道場の建設について当時のスポーツ局センター長ケン・ボックス氏と相談し、会議も行われたが、ボックス氏は企業の飾り版を付けることに反対し、三菱会社や他の企業に対する恩義になることを心配した。また、道場に会社名を付けることにも反対した。さらに、この道場は柔道と合気道だけでなく、ヨーガ、太極拳、レスリング等にも使用できる総合武道施設として、建物の設計案は最終的に大学の責任という視点を持った。数週間の討論が続き、数ヶ月が経っても結論が出なかった。結果として三菱会社はこのプロジェクトから距離を取り、インドネシアにおいて武道センターの建設を支援することになった。(タスマニア大学武道館建設中止)

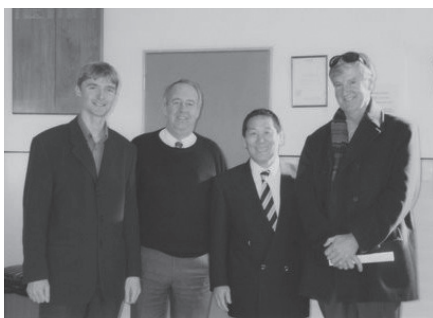


写真16 タスマニア大学、2001年

ケン・ボックス氏の退職後、トニー・ブートル氏はスポーツ局センター長として任務することになった。1990年代末に再び道場建設のプロジェクトに力を入れることになった。副学長もトニー・ブートル氏もこのプロジェクトを応援し、大学側は必要な基金を用意した。ティム・ウォータス氏は大学柔道クラブのミロス・コヴァチク氏に応援を受け建築家のデビッド・パットン氏と相談した。新しい道場が大学スポーツセンターの別館として設計と

建設されることになった。合気道クラブは新会長ジョン・スティーン氏の下で24万ドルの柔道畳を購入した。この畳は道場の床の面積に十分だったし、全国選手権大会等の公開公式大会の安全規則に合う予備の畳もあった。新道場が2001年6月に公式に公開され、タカは来賓として参列した。タカは数年間、道場建設のプロジェクトに従事し、開設の実現を喜んでいて。タカは日本から有名な書道家の一文字「氣」を持参した。この額は道場開設を祝うために特別に作られた作品で、タカはこの額を道場に寄贈した。(公益法人・創玄書道会・鈴木謙風作)

## 第9章 中島紇先生のレガシー

### タスマニア州警察

中島先生は優秀な武道家で、タスマニア州に滞在した約7年間に柔道と合気道の普及と振興に大きく貢献したことに間違いはない。ただし、警察の関係者は彼の最も重要な業績は警察官の訓練にあったと考えている。タカは警察学校において警察官の体力測定の基準とスポーツトレーニングの管理体制を設定し、護身術を含む警察官の専門指



写真17

導を行ったので警察に大きく貢献したと思う。

タカの継承者になった人は、彼が設定した標準に従うのは、大変な仕事であった。彼の後を継いだ指導者はタカの実力には及ばなかった。

警察学校の生徒の訓練方針、内容において多少の変更があったが、訓練の目標と方針が残された。

残念ながら、タカのレガシーは彼が警察訓練や柔道と合気道を指導した生徒の心の中に残っているが現在、当時の生徒の中で今も柔道や合気道を続けている人はほとんどいない。タカが帰国して30数年年月日が経つと、個々人の人生が大きく変わり家族を作ったり、家を建てたり、転職したり、引越したり、退職したり等の様々な理由があると思う。

タカは東京にある国士館大学の卒業生であり、若い世代の指導者としてタスマニアに来た。彼が国士館大学の武道精神を持ってきた。武道の技術的な原理を教えるだけでなく、ロクビーアカデミー警察学校の道場に限らず何処へ指導に行っても、我々生徒に自分の限界を超えて精一杯目標を目指すこと、何があっても諦めないこと及び自己と他人を尊重することを伝えた。タカは人格形成、チームワークを信じた。指導者として、タカは技術だけでなく、自己の精神力の強化を得ることを目指した。

国士館大学を訪ねる機会があったタスマニアの生徒達はタカ有能力、理想と情熱が育てられた源泉が見られた。(国士館イズム)

タカは警察学校の若い生徒と一般の警察官に重要な影響を与えた。タカの護身術の指導について技術力より精神力が大事という意見を持つ関係者は少なくない。タカは技より技術の原理の理解を強調した。タカは警察学校の関係者に広く尊敬されたが、特に16~17才の青年に敬われた存在だった。彼のアプローチは只指導することだけでなく、生徒に見本を示すことにあったからである。タカはよく柔道等の武道は競技ではなく人生の道だと強調していた。日本語においても「道」とは文字通りにみちの意味となる。(Way of the Life)



写真18 護身術のクラス中に短刀取りの技を演武するタカの姿

1990年代に入ると、警察官の訓練に影響を与えた様々な変更が始まった。警察官が訓練を受けるコースの期間が2年から38週間にされた。結果として現在、護身術の訓練期間は2週間しかない。警察学校は現状に対応していても現在の現状は、タカが活躍した1975年代と全く違う環境となった。

タカのことを知っている同僚は彼の周りにいる人々に個々人が精一杯に自分自身の目標に向かって努力できるという影響を与えられたと信じている。タカが指導した生徒の中で柔道と護身術において優秀な成績を残した人がある。また、オーストラリア全国で各地の警察において重要な役割を果たし、教官として警察官の新世代を指導し、警察の将来を考える人もいる。彼らは優れた後継者を次の世代に伝えるには間違いない。

### タスマニア州の柔道連盟

柔道はタカが一番得意な武道種目といえる。彼は柔道経験が長く、柔道の振興と理解への情熱にも間違いがない。タカの経験、実力と柔道の普及と指導する情熱はタスマニアの滞在中に活かされた。

初めてタスマニアを訪ねた時、彼の実力がすぐ見られ、タスマニア柔道界との強い絆が作られ、特にジュニアのレベルにおいてタスマニアでの柔道に必要な刺激を与えた。タカは再びタスマニアに戻ってきた。また、多くのタスマニアの柔道家を競技選手として活躍できるレベルまで指導した。

タカの柔道指導へのアプローチは厳しさと優しさの両面を含めた。彼は厳しく指導した時もあるが、厳しさより優しさを強調した。タカは「第一は安全」「第二は楽しさ」という原理に基づいて指導した。タカの柔道への最も重要な貢献の一つは彼の指導法にあった。タカは生徒が稽古を楽しめると、厳しく指導するよりも自然に進歩と技術の習得ができるようになるという原理に従って指導した。また、指導者は自我を抑えなければならないことを強調した。自分の自我とプライドを抑えず稽古中、厳しさだけで教えようとする指導者には生徒を持ち続けることができなく、生徒の尊敬を失うことになる。指導者は生徒より道を少し進めることができるが、指導者もまた同じ道を歩む一人の生徒であるからである。したがって、自分の知識と技能を生徒と分かち合い、生徒を導くのは、指導者の責任である。また、自分の実力を活かす生徒の姿を喜んで、誇りに感じることも指導者の役割である。

タカの観点では、基礎体力は柔道家として成功するための条件だった。また、基礎体力は柔道家に限らず全ての人々に必要であると強調した。タカは基礎体力を向上させる練習法等を考え、ロクビー警察学校だけでなく、多数の道場においても様々なトレーニング方法を実習して見せた。ランニング、ウエイト、用具の使用、体操、栄養のバランス等は彼らの基礎体力を強化させるためのアプローチの柱だった。特に州及び全国の選手権大会を目指した強化選手



写真19 タカが参加した最後のイースター柔道キャンプ

はタカの指導の下で自分の限界まで基礎体力作りに励んだ。

タカは打ち込みの反復練習を強調した。打ち込みは相手に対する自然な感覚を身体で作るため、技を掛けるチャンスが解ってくる練習方法である。打ち込みで何回も同じ技を繰り返すと、技は自然に出てくるようになり、乱取りや試合で自然に出てくることに繋がる。

警察アカデミー柔道クラブの設立に力を入れたおかげで、タカは才能ある柔道選手が集まる場を作った。地域の強化選手は所属クラブで練習しながらもアカデミー柔道クラブの稽古にも参加するようになった。彼らには、アカデミー柔道クラブでの練習は、タスマニアの最も優れた指導者の下で自分の能力を発揮し、技を磨くチャンスになった。タカが指導した多くの強化選手は後に州や全国レベルまで上達し優秀な成績を残した。



写真20 タスマニア州の柔道選手

タカは彼の実力と情熱を通じてタスマニアの柔道に大きく貢献し、タスマニアでの柔道のレベルを向上させた。おかげで、タスマニア州の柔道選手の実力が高められた。1984年の無差別級のナショナル・チャンピオンであり、現在ニューサウスウェールズ州柔道連盟の会長マイケル・ブライア氏がいうように、タスマニアの我々は「皆んなこの小さな男に、たくさんの事を学んだ」、...と。

## タスマニア州の合気道連盟

時間が経ったと同時にタカは柔道と警察訓練に与えた影響と刺激は伝説の世界に入った。現在の柔道指導者の中でタカに強く影響を受けて、彼の指導法に関する価値観と柔道の技術を教え現場で活かす人がいる事には間違いはない。しかし、現在の若い世代の柔道家の大多数には、タカがタスマニアの柔道へ与えた刺激と彼の貢献に対して評価ができない。タカは今でも本物の柔道家だが、霧に包まれた存在となった。

柔道とは違って、合気道においてもタカの貢献度は生きている。彼がタスマニアに設立したオーストラリア富士流護身道はアジア護身道へ拡大し、1978年に設立されてからニュージーランドのクラストチャーチ市と南太平洋のサモアにある道場が加盟し、タスマニアにも道場が三つある。

現在のシラバスの内容はタカがタスマニアに滞在している時に作成したシラバスとほぼ同じである。審査規定も彼の基準と方針に従って行われる。タカは組織の後援者であり、会長として活躍しているティム・ウォータス氏と現在も連絡を取り合っている。タカは1981年に日本へ帰国してからも、彼の基準と技術の方針が維持されている。当時、タカの最も上位の生徒だったブロンリン・スミス氏とティム・ウォータス氏は彼が残した技術と指導方針のレガシーを守っており、二人とも、今日まで組織内の最



も上位の先輩として合気道の活動をしている。また彼らは他の上位の生徒にも尊敬されている。ブロンリン・スミス氏とティム・ウォータス氏も彼らが指導した生徒の中にも高段者になった生徒もいる。



写真21 合気道の師範中島先生、タスマニア大学2001年

元々タカが作成した稽古のシラバスは組織の教本として残されている。この教本は今日の合気道の指導と学習の主な基礎となっている。1990年、海外にも高く評価されてきた指導者向けの手引きが発表された。この手引きにおいて指導者に要求されている基準がまとめられ、1級と2級の指導員資格を目指す人を対象としている。この指導マニュアルの内容を見ると、タカ中島先生の影響と理念が残っていることが明白に解る。

タカのレガシーは技術的な業績と彼が伝承した技よりも彼の指導に対するアプローチにある。タカは無欲で、心が広く、何も控えずに生徒に何でも教えた。この何でも伝えるという情熱は止まらない程、熱かった。指導者の心の中でこの情熱が残っている。「第一は安全」、「第二は楽しさ」というモットーと共にタカの合気道への重要な貢献及び彼のレガシーとして残っている。

## 第10章 思い出

(著者注釈)

以下の思い出はタカの生徒と友人が作成した文章である。参考になった情報も様々あったので、できる限りに本文に入れた。しかし、読者に分かり易くするために、必要に応じて簡略した場面もあり、簡略した場合も文章の元の意味を保存した。(TW)

**Superintendent (Ret) Col. Fogerty (Tasmania Police Academy)**

**コール・フォガティ氏(タスマニア州警察学校長)**

1975年末頃に警察学校で初めてタカと会った。私は当時、任務中の警察官の訓練を担当していた。タカの最初の仕事は護身術を指導することだった。後に、この護身術の訓練は警察学校全体の生徒と警察官に指導された。タカが開設した合気道と柔道のポリスアカデミー柔道クラブは警察官とタカに関係があった家族と友人を対象にした。私も、妻と子供達も一緒に参加した。この練習は柔道と合気道の参加者の人格を育成するには最適であった。タカと彼の後継者トシとヨシも警察官逮捕術の訓練に大きく貢献した。私は後に、警察官訓練の担当者になり、警察学校長にもなったので、色々な機会と一緒に仕事することになった。おかげで、友達としての絆ができて、今日ま

で友人として親しい関係が続いている。またタカの妻とオーストラリアで生まれた三人の子供たち豪州、朋子と桂まで親しくなった。2010年9月、日本を訪ねたとき、タカと愛子の自宅で泊まって、一緒に過去を思い出しながら良い時間を過ごせた。

現在、日本人指導者を任務させる制度の廃止はいまも残念だと思っている。数百人の警察官はタカのことを尊敬し、彼のスキルと実力及び彼の優しい人格を惜しんだ。タカは彼と日本人全体についての冗談も好きだった。ある日、アカデミーの映画館で「トラ・トラ・トラ」が上映された。この映画を見た時、私は「日本人は、戦争に負けてしまっただけだね？」と冗談を言ったが、タカはこの映画は日本で上映されたら、「日本が勝てたはずだよ。」と答えた。(冗談)

また、一緒にキャンプに行った時のことを思い出します。その時、豪州が生まれたばかりだった。愛子は日本の習慣に従ってタカの面倒を良く見た。我々はお皿洗いの当番をくじで決めることにした。タカは2日間連続お皿洗い当番になった。3日目に騙されたと分かった。これは愛子に日本とは違ったオーストラリアの習慣を示したエピソードの一つである。今回、日本で合った時にこの話を思い出して皆で笑った。愛子が休んでいる内に皿洗いするタカの姿は本当に楽しかった。愛子はいまでもこの「オーストラリアの伝統」を捨てられないかもしれない。

(＊この話は、各々が好きな番号を想像する。そこで順番に番号を披露すると、必ずタカの云った番号が当たり番号となるように打ち合わせをして置くトリックです。)



写真22 中島家

タカのおかげで私の腰痛が完治した。1976年に交通事故に遭い、腰を痛めた。医師にもう完全には戻れないと言われ、自分自身も諦めていた。アカデミーでタカに診てもらって、彼が治せると言ったが信じられなかった。彼が私のために考えたマッサージ&エクササイズと柔道や合気道の練習のおかげで段々よくなってきた。今では全く問題がない。永遠に心より感謝している。

現在の警視総監デレン・ハイン氏もタカの大ファンの一人である。

### Paul Fox-Hughes (University of Tasmania Aikido Club)

#### ポール・フォックス・ヒュージェズ氏(タスマニア大学合気道クラブ)

1980年、私は合気道の初心者クラスに入門し習い始めた。当時、タカという名は広く尊敬されていた。青年だった私は、ハリウッド映画の影響をかなり受けて、タカのことを老人として想像していた。セブンマイルビーチの合気道キャンプにおいて初めてタカと出会った時、このイメージが破られた。笑顔の少年っぽく若い男性は皆に被ってい

たゴルフ帽子を振りながらオレンジ色のミニカーから降りてきた。

タカが翌年日本へ帰国するまで毎週火曜日の夜、旧警察の施設にタカの下で合気道の稽古に励んだ。合気道のクラスが楽しくて、一階上で練習している警察音楽隊の音が聞こえても我々の励みになった。中島先生が受けてもらって一緒に基本技を稽古した機会を思い出している。両手取り四方投げの動作をほぼマスターしてきた時に、タカが突然走ってきて私の手を掴んで攻めてきた。何回も同じ動作を繰り返しながら受けてもらい、タカ自ら受けをやってくれた。

当時、日本人の高段者は初心者のため熱心に受けてもらうのは例外なのは知らなかった。



写真23

タカが帰国した1981年から再び畳の上で会う機会があるまではほぼ20年が経った。タカは2001年に大学の新道場のオープニング式のために訪ねてきた。タカは火曜日のクラスを含めて様々なクラスに出席した。腰技も含めて様々な技を指導した。また、腰技が好きと言った。タカのアドバイスと印象を聞いてみたが、彼のアドバイスの中で彼も腰技が好きということしか思い出せない。しかし、彼が腰技を演武した時に受けた思い出は残る。何も感じなく、世界が回ったという感覚があったという強い印象が残った。

この例外的な指導者と優しく心が広い人と長く稽古できなかったことを今まで後悔している。

### Robert Wedd (Hobart PCYC Judo Club)

#### ロバート・ヴェッド氏(ホバート市警察・市民柔道クラブ)

初めてタカ中島と出会ったのは、1972年10月のホバートショルダーの時であった。タカはシドニーの武士道柔道クラブと以前にタスマニアを訪ねたことがあったがその時は彼と出会うチャンスがなかった。武士道柔道クラブの遠征の結果として当時、タスマニア州柔道連盟の会長だったモーリ・アップルヤード氏はタカをオーストラリア滞在期間の最後の半年をタスマニアで過ごすように勧めた。タカは休職して、ニュージーランドとオーストラリアにおいて柔道の普及と振興に努力した。タカはホバートに再び戻ってきた時に彼と初めて出会うことができた。

初めて会った日、ホバート市から会場までタカと一緒に電車に乗ることになった。電車で話しながら親しくなったと同時に40年以上も続く友人関係がスタートした。柔道連盟がタカの宿泊を探している数日間、タカは我が家に泊まることになった。タカは連盟に用意されたアパートに移動した数日間後、彼はこの環境に寂しそうに感じ、妻の

ブロンリンと相談して私達と過ごすことにした。アパートから問題なく退住ができて再び我が家に同居することになった。タカは我が家族の一員になり、6才の息子デビッドと18ヶ月だった娘のアニタのお気に入りとなった。

この半年間、タカはタスマニアの柔道に重要な刺激を与え、彼の指導能力と人格を通じて様々な人々の人生に影響を与えた。彼は様々な人生に影響を与え、教育と練習での努力を強調することを通じてタスマニアの若い柔道家の彼の生徒を良い方向に導いたことは間違いない。

タカは1973年4月に「妻を見つけるために」一時帰国、日本へ旅立った。

タカはタスマニアへ戻ってくる希望を表した。当時、タスマニア州警察はロクビーにおいて警察官を育成するための新しい教育機関を開設する計画があり、実力がある護身術と保健体育の教官が必要となった。当時の警察大臣ビル・ニルソン氏は私の隣家であった。(後の総理大臣)

警察大臣兼警視総監のクノールス氏とティム・ウォータス氏と私が企画した会議をアレンジし、警察大臣兼警視総監に高段者の指導者が必要性であると伝えた。

我々が提案したのは少なくとも柔道5段と合気道5段という資格を条件として保健体育の教官のポストが広告された。タカは申請し、成功した。タカは1974年12月に妻の愛子とタスマニアへ再び戻ってきた。

1975年の初め頃に、タカと妻愛子はティム氏の手伝いで我々の家の下に用意されたアパート(住居)に入り、再び我が家族の一員となった。当時、タカも愛子も英語がほとんどできなかった。

1975年の初め、タカを紹介するために、タカと愛子を連れてタスマニア州の警察訓練所を回って護身術の演武会を行った。演武の際に、私はタカの相手をして技を受けた。

警察での仕事を中心としながらタカは地域の柔道家の育成にも力を入れて約7年間タスマニア州の柔道のレベルを著しく向上し、後にナショナルチャンピオンになった選手も育った。

また、個人としてタカと「柔道の形」の稽古に力を入れた。今でも「柔道の形」への関心を持っている。

滞在中に、タカはオーストラリア全国の選手が参加出来、日本人の指導者も参加した柔道のイースター柔道キャンプを開始した。(1976年)

柔道に興味があったおかげで、中島家と友達になり、多くの日本人と出会える機会もあり、妻とオーストラリア日本協会の会員にもなった。私はオーストラリア日本協会の理事として任務し、最初の名誉会員にもなった。2009年、日本の大使館から日本とオーストラリア間の相互理解と友愛を深めるための貢献を承認する「豪日親善功労賞」を授与された。

柔道とタカと彼の家族から受けた影響のおかげで、私の家族はいまでも日本への興味を持っている。娘のアニタは1986年にタカの長男中島豪州と一緒に日本へ行った。



その後、もう一度日本へ行くチャンスがあり札幌で3年間英語を教えることになった。タスマニアへ帰国してからは日本語を教えながら大学で教員免許を取った。

我が家で同居してから約2年後、タカと彼の家族はロクビー警察アカデミーの宿舎へ移動した。タカの息子豪州が1975年に生まれた。1981年、中島家は日本へ帰国した。タカは教員として母校国士舘大学に勤めることになった。

我が家族は今日まで中島家と友愛関係でつながっており、日本を訪ねた際には幾度もタカの家泊まった。

タカと愛子は現在5名の孫を誇る祖父と祖母となった。

タカ中島は広く尊敬されたタスマニア州警察の一員だった。彼は今日まで多くの警察官と友人関係でつながっている。タカの柔道と合気道への貢献は残る。

40年間、タカと愛子と彼らの家族と結ばれていることは誇りと感じる。健康と幸せで過ごせるように祈っている。

#### **Bill Hart (Nakajima Judo Club, Dunedin New Zealand)**

#### **ビル・ハート氏(中島柔道クラブ、ダニーデン市、ニュージーランド)**

1960年柔道を始めた時、柔道の修行は私自身と私の家族にここまで影響を与えることとは知らなかった。選手の引率で大会に参加をしたとき友人となったジョン・ボニフェスと出会うことができた。私のチームのメンバーはジョンの両親の家で泊まった。ジョンは私の家族の友達にもなった。ジョンは日本で柔道、合気道と空手道を修行に行った時にタカ中島と出会った。ジョンはタカと一緒にニュージーランドに来るよう誘った。タカはジョンと一緒にニュージーランドに戻った。ジョンはタカの協力でニュージーランド・クラストチャーチ柔道クラブの運営を続けた。タカはジョンの両親のビルとドット・ボニフェスご夫妻と過ごした。ジョンの両親を「父ちゃん」「母ちゃん」と呼んだ。ジョンの両親はタカのことを大事にし、タカもジョンの両親を大切にしていた。不幸な事に、ビルとドットは今は亡くなった。ビルは1990年、ドットは2003年に亡くなった。

ジョンとタカは幾度もダニーデンに来て、私の家に泊まった。彼らはダニーデンYMCA柔道クラブで指導し、投の形の演武も行った。我々はこの二人の形を撮影した。当時、ビデオがなかったため、プロの写真家に頼んだ。タカとジョンがダニーデンを訪問した際にオーストラリア・シドニーから武士道柔道クラブのブルース・フェガン氏がクラブチームを連れて訪ねてきた。武士道柔道クラブのチームがシドニーへ戻った直後、タカはブルースのクラブに移籍した。その後は1974年タスマニア州ロクビー警察アカデミーで勤めることになった。1981年、私はクラブの選手4名を連れてホバートの近くにある警察アカデミーに行き、タカと竹村俊幸氏と稽古をした。

タカは自然体で親しみやすい人物である。タカは初めて私の娘と出会った時、スパー

ンを持って彼女に食べ物を与えた。彼女は笑いながら口を開いた。タカは私の娘を「キャサリーン」と呼んだ。彼が練習から帰ってきた時、疲れて床に横になって伏した。私の娘は彼の側にゆき、彼の腕枕で寝ることを楽しんだ。

ジョンとタカがクラストチャーチに帰った時に彼女は大泣きした。

タカはダニーデン柔道クラブで指導を行い、自分のトレーニングとして町の最も険しい坂道として知られたヴェー通りを走った。この通りは、練習が行われたYMCAの入口の反対側にあったので、良い準備運動だった。タカは練習生と一緒に走るように誘ったが、実際に彼と走った人は少なかった。

(エピソード)

この坂道の両サイドが駐車場になっていて車がゆっくりと走るのタカがその車を追い越して走る事から「ザ・ファースト・マン」という記事が新聞に掲載された。

タカは警察学校での7年間の任務が終わり、1981年日本へ帰国した。彼は1938年型のモーリス8号の古い自動車を持っていた。この車の前の持ち主のお孫さんの名前がスージーと云うのでこの車を「スージー」という宛名を付けた。タカは自動車を日本へ持って帰った。タカの車は後にテレビに出演することになった。

1992年、再びタカとはジョン・ボニフェス氏の葬儀で出会った。

新しいクラブを設立するためダニーデンYMCAから独立することにした。その時、クラブの名前を考えて「中島柔道クラブ」という名を付けた。我々のクラブはニュージーランドにおいてよく知られていた。タカは無差別級とクラブ大会の賞品として「優勝盾」を送ってくれた。また、文字の入った帯と柔道着、還暦にDVDテープも送ってくれた。

ある日、夜遅くタカからの電話があった。次女の桂を数ヶ月一緒に過ごせるかどうかと頼んだ。(ホームステイ)桂はクイーンズタウンでスノーボードをしたかったからだ。



写真24 ビル・ハート氏

これは1999年のことだった。桂は優しくマナーが良くて、優しい女の子で、一緒に過ごせたことは誇りだった。

桂と一緒に過ごした間に、ある日に「將軍」というテレビドラマの話をした。タカは日本でこの映画のテープを見つけて、このテープを日本から送ってくれた。今でもこのDVテープを見ている。江戸時代の大名の話である。

顧みると、柔道のおかげで、タカ中島夫妻とイボル・エンディコットデビス氏も含めて様々な人と出会うことができた。

**Maurice Appleyard (Kodokwan Judo Club, former President of the TAJU)**

**モーリス・アップルヤード氏(講道館柔道クラブ)**

彼が1972年に武士道柔道クラブがシドニーから訪ねてきた際にタカと初めて出会う

機会があった。チームの団長はブルース・フェゲン氏だった。タカは私と妻のリンのところでホームステイした。我が家はホバート市北部のワレンにあった。タカは息子のディーンの部屋に泊まって息子と仲良くなった。部屋でレスリングをして、妻に木のスプーンで叩かれて注意された。後に二人とも何回もこのスプーンで注意されることがあったが、タカはこの時に「このスプーンは何だ」と聞くことがあった。

シドニー開催の全国選手権大会にブルース・フレゲン氏が私と相談した結果、タカが滞在期間の最後の半年、タスマニア州柔道連盟に移籍することになった。シドニー地域のクラブではタカに興味がなかったのか或いは経済的に不可能であったのか、そこで私はこの話をタスマニア柔道連盟の役員に提案した。役員の中でジョー・クレセン氏は反対したがタカを誘致する計画が賛成された。講道館柔道クラブとタスマニア州のクラブは応援し、特にジュニアが多いクラブは積極的に好意を示した。

タカはデボンヌーサリーという植木屋に勤めることになった。「この小さい男は肥料が入っている巨大な器等の重いものを片手でも楽に運ぶ」という話を何回も耳にしたという記録はある。確信がないが、タカは最後までデボンヌーサリーで働くことになった。彼が得た給料は高くはないので、クラブで追加クラスを指導するようになり、このクラスは追加給料になった。



写真25 ベリーデール公園

タカは1973年の半ばに日本へ帰国した。当時、私は観光局で勤めていた。タカが出発した時、私は2週間のハイクでクレードルマウンテンレークセントクレル国立公園にいた。タスマニア州柔道連盟と友人はベリーデールの特別保留地において彼の送別会としてバーベキューを開くことにした。私はハイクでクレードルマウンテンレークセントクレル国立公園を出て妻に車でホバートまで連れてもらい、バーベキューでタカの別れの挨拶を行うにはギリギリ間に合った。

送別会でタカとの写真を撮らせてもらった。この写真をタカと私のことを知らない人に見せると二人の国籍を聞くことがある。「日本人とインド人」という返事が出てくる。私はハイクで黒くなっていたからである。



写真26

ケン・ウィットル氏はクラレンス警察柔道クラブの少年部の練習においてタカを巴投げで投げようとした時にタカの胸を足の爪で切って彼の血が流れたことを思い出す。タカの血痕が除かれずそのままボールペンで丸で囲まれて残された。タカの名もそのそばに書かれた。この血痕は私にとって最後の軽量級のタイトルを取るためのインスピレーションとなった。決勝戦においてケン・ウォーカー氏と対戦し、彼の防禦を破れなく技が決

められなかった。払腰で攻めてみたが、ウォーカーに防がれた。下を見た瞬間に畳の上にこの血痕を見てタカがよく使っていた足車を思い出した。払腰を足車に変化し、完璧の一本勝ちを取った。(万歳！)

**Dr. David Matsumoto, Prof. of Psychology (San Francisco State University)**

**デービッド松本教授(心理学博士、サンフランシスコ州立大学USA)**

### お祝いの言葉

中島紇教授の武道とタスマニア、&オセアニア地域、各州への貢献を祝う本書にお祝いの言葉を提供することができて栄誉です。

タスマニアから日本へ帰国してから少し時間が経った1990年代前半に中島教授は全日本学生柔道連盟の代表チームを連れてサンフランシスコベイの地域へ訪ねてきた。その時に中島先生と初めてお出会いすることができ名誉でありました。初出合いではお互いに相手のことを知らず内に中島先生も私も大学の教授であることが解って大変喜ばしく思いました。中島先生は武道と体育教育を専攻に、私自身は心理学を専攻していますが、研究者であり教授であることは共通であった。

研究分野の違いにもかかわらず、中島教授は豪放に私の研究室を訪ねてきました。この初訪問を出発点として一生続いていて対話が始まり、様々な機会において学術、研究、柔道、学問等についてお話するようになった。

その後、日本に行く機会があり再び中島教授と出会い、中島教授と共に武道の研究及び体育教育の研究に励んでいる他の学者達とも会えることができた。

この研究者の方々との出会いは、私の人生が大きく変わったきっかけとなった。それまで武道の学術的研究を行う学者の存在について全く知りませんでした。しかし、中島先生と中島先生を中心としているグループは日本武道学会に所属する教授の中でも珍しい存在であります。その時、柔道界に係わる学術研究の向上を目指して様々なプロジェクトを実施し、お互いに協力する事に同意しました。

同じ頃、私は米国柔道連盟のコーチ委員会委員長と強化委員会委員長に任命され、1993年から2000年まで役員として勤めることになった。コロラドスプリングスのオリンピック・トレーニング・センターにおいて全国のコーチ会議を開催することになり、コーチ会議のキーイベントとして研究シンポジウムを開催することにした。

柔道の科学的研究と実技指導の現場との関係を強化することを目指して中島教授をコーチング会議に招待しました。これに答えて、中島先生は数年間続けて日本各地の大学の柔道科学研究者約20名程連れて幾度もコーチング会議のシンポジウムに参加することになった。(1992~1998) このシンポジウムで行われた研究発表が現在の国際柔道科学研究会組織を設立する出発点となった。

1998年、偶然の出来事に、当時の国際柔道連盟の会長ヨン・スク・パク氏に第一回世界柔道会議を開催するための準備の手伝いをするを頼まれた。この会議は1999



年にイギリスのバーミングハムで開かれる世界柔道選手大会との共同開催として計画された。この会議のメーjayイベントとして国際柔道シンポジウムが開催され、中島先生は日本人の研究者を連れて参加し、柔道の科学研究を世界に発表した。

この国際柔道シンポジウムが現在も続けられて世界柔道選手権大会と同時開催されることになり2001年にミュンヘン(ドイツ)、2003年に大阪(日本)、2005年にカイロ(エジプト)、と2007年にリオ(ブラジル)において開かれるようになり、中島教授はこのシンポジウムに大きく貢献された。中島先生は毎回、日本人柔道科学研究者を連れて参加し、中島先生のグループの人々が研究を発表し、研究者ネットワークや友人関係及び世界の柔道研究者との新しい絆を作った。

我々研究者は、世界柔道選手権大会時の会場内に掲示された種々の研究プロジェクトをまとめたポスターを大変興味深く楽しく拝見いたしました。選手と観客が大会会場において世界各国の柔道科学研究者が行った研究について読まれたことは、我々研究者達の名誉であります。

この国際柔道シンポジウムに関して、中島教授のご貢献は言葉で言えない程でした。

国際柔道会議と国際柔道シンポジウムがほぼ認知された段階に当時の国際柔道連盟の教育委員会委員長の山下康裕教授と協力し、世界初の柔道研究者の組織の設立に努力した結果「国際柔道研究者協会」(International Association of Judo Researchers)が設立された。新たな組織の役員が必要となったので、中島先生を日本の代表役員として任命することにしました。中島先生は今日まで至って国際柔道研究者協会の役員としての任務に尽くしております。(2013年退職に伴い辞退)

中島先生のタスマニア、ニュージーランドとオーストラリアでのご貢献に対してお祝いする本書を読んで大変感動しました。中島先生は武道指導だけではなく社会全体にも大きく貢献されました。また、中島先生を招待し、タスマニアに滞在できるようにご協力と応援した方々の努力も深く感動しました。愛好している柔道のために尽くされ方々の努力に思い起こされます。中島先生の場合、多数の方々が努力したおかげで、実力だけでなく、カリスマ的で人格が良い柔道家が柔道と合気道の振興に貢献できるようになりました。中島先生のような存在のおかげで、柔道は今日まで至って世界中に広まってきました素晴らしい文化の発達です。本書は中島先生を初めとし、柔道のために尽力された方々への贈り物であります。



デービッド松本教授

中島先生のタスマニア州におけるご活躍を記録する本書が作成されて大変喜ばしく思います。中島先生との初出合いができたのは、日本への帰国の数年後のことでした。タスマニアで過ごした時期についてのお話しは、中島先生の愛情と情熱のお心が強く、最も重要にタスマニアの人々への愛情と情熱が強く感じられました。中島先生に対する愛情、忠実及び専念はお互いの気持ちを表しています。その意味で、この本は大切にしなければならぬ「愛情物語」であります。

**Peter Stefaniw (Clarence PCYC Judo Club)**

**ピーター・ステファニー氏(クラレンス警察青少年市民クラブ)**

1970年後半から80年代前半までの間に深く柔道に携わった人々はどうして40年以上においても続いているのか？ 強い友愛と絆を作られた事に関していく度も驚きました。

最近のことです。パースで全オーストラリア柔道大会が行われその時にタカと再会したことです。パースにアンディ・ウィットル氏、メルボルンにマイクとキム・スタンフィールド氏、シドニーにスーとファイリッパ・マクドモット氏やマイクとトルシー・ブライア氏という昔の柔道仲間と会う機会に我々の間に作られた絆について考えて見た。昔の仲間と会う時、毎回、大事な思い出が浮かびます。タカがいた頃からの友情関係は変わらず、お互いに遠慮や変な感じがなく、最後に会った時と同じ気持ちを感じられます。

ちょっと前、久しぶりに柔道の古い写真を見た。その中にロクビー警察アカデミーとクラレンス警察青少年市民クラブで行われたイースター柔道キャンプの写真があった。新聞の切り抜きを見ると、タスマニア州の柔道チームがタカに指導された時期に達成した業績とタカが我々に与えた影響を思い出します。写真を見てタカと一緒に過ごした時代に柔道を楽しんだ仲間との友情関係が強く信じられる思いとなりました。

当時の柔道チームの特徴とタカの指導法は我々の強い絆の基礎になったと信じている。タカは我々の柔道を向上させることを通して我々の友人関係を強化した。タカによく試合の時に「諦めるな」！「がんばれ」！とよく言われたが、この表現は彼の試合に対する心構えでもあった。

この価値観に従うことを通して我々には友人関係、チームスピリットと絆を作ることを身に付けられ、我々柔道家の間でできた友人関係は家族や共同体と同じぐらいほど親しくなった。私は今日でもこの価値観を大切にしており、我が家族、仕事の仲間と数年間の間に渡ってできた友人まで活かすことにした。

当時、我々がタカに指導された柔道と他の指導者が教えた柔道の差をよく解らなかった。柔道を通して何を学んだというのは、数年後に初めて解ってきた。柔道を通して身に付けた価値観と態度は全ての領域において応用してみた。柔道に限らず全ての領域においても実力を身に付けるために、柔道の練習で体験した事と同じ態度が必要であった。柔道において粘り、反復すること、もの事への理解、諦めないことが求められた。この価値観は、タカが我々に与えた影響の鍵となっていた。タカは何を挑戦しても、壁に打ちあってもこの壁を越える方法を探し、成功したのである。彼のものごとへのアプローチは冷静で、ずっと彼のアイディアについて話し続けながら相手に何も求めずに彼のアイディアを皆と共有し合う。そうすると、彼のアイディアで段々と大きくなり、小さなアイディアへという種から徐々に実現できる大きなアイディアという実が生まれてくる。

以上のように、イースター柔道キャンプがタカのアイディアから誕生され、イースター柔道キャンプの発達を見ると、タカのものごとへのアプローチが解ってくる。タカの影響は周りの人より大きいな存在になることではなく、むしろ彼の話聞き、彼らのことを理解することにあった。彼のアイディアが実現された。私から見ると、タカのアプローチは今まで私が経験したものと全く違うものであった。

時間が経つと、努力と粘り強さという価値観は私の人生に与えてくれた。タカが教えてくれた価値観のおかげで私自身が成長でき、一緒に仕事している仲間と友達にもこの価値観は良い影響を与えている。また、本当の友愛が解ってきた。これは、タカの指導力、彼の人格及びタスマニア州柔道チームでできた仲間のおかげで学んだことです。

一緒に厳しい練習に励みながら、何回も技を反復し、我々がした努力の成功を味わったという同じ経験をするのは、今日まで続いている友愛のキーとなっています。我々の間に成長してきた友愛は仲間の家族と子供まで広がり、オーストラリア各州の選手と仲良くなり、タカの母校国土舘大学とのつながりのおかげで日本との縁もできた。

タカは毎年開かれるようになったイースター柔道キャンプを始めたが、このイースター柔道キャンプをタスマニア州柔道の主なキーイベントとして評価している方々も多くいます。タスマニアの選手がオーストラリア全体と日本からの様々なレベルの選手と力を比べることができたのは、このキャンプの主な強点でした。このキャンプはタカが元々クラレンス警察市民柔道クラブにおいて開始したのですが、はっきり覚えていませんが、1976年頃のことだったそうです。クラレンス警察市民クラブの前で柔道家25人が並んでいる写真があります。この写真が同1977年に撮影された写真であります。この写真に写っている柔道家の中で、ケリ・ウェークフィールド、アンディ・ウィットル、ジョン・ディーコン等の実力が高い、州や全国で活躍した選手の姿も見られます。キャンプにおいてタスマニア州各地の柔道家が参加し、参加者の大部分はタスマニア州を代表する選手や全国選手権大会の強化選手も参加しています。

タカのイースター柔道キャンプはタスマニア州の柔道代表団を強化した固定なチームに発展と成長させることに重要な役割を果たした。イースター柔道キャンプは、タスマニア州各地の選手が柔道の技術に関する知識を交流し、技への理解を高め、各選手の実力を正しく評価されるための刺激になった。また、イースター柔道キャンプはタスマニア各地の柔道クラブが地方と全国の大会において一つのチームにあわせられた基盤となった。このチームが得られた成績と成功はタスマニア州の柔道の強さを明白に示した。世界大会においてオーストラリアの代表選手として出場したり、全国大会において活躍したタスマニアの選手の競技力が高く評価された。タスマニア柔道の強さの鍵の一つは選手の基礎体力にあった。タスマニアの代表選手は体力的に最も強いチームの一つとして広く知られていった。

イースター柔道キャンプの練習場は体育館の床の面積をほぼ覆った日本製の畳の上で行われたことを思い出す。皆でこの体育館で一緒に稽古し、食事と一緒に食べ、同

じ場所で寝ました。イースターホリデーの4日間、一日4回の稽古であった。朝稽古は体力作りを中心にしたランニングと補強トレーニングを含め約2時間。午前の稽古は寝技の稽古。午後の稽古は立ち技オンリー。午前、午後の稽古時間は約3時間であった。夜の4回目の稽古は形を中心とした技の研究が約2時間。一日10時間稽古であったと記憶している。

イースター柔道キャンプの4日間は体力的に厳しく、柔道家の間に擦り傷、打ち身、筋肉痛は普通位ほど多かった。この稽古の強度の高さはタカの指導法の基盤でした。この練習を続けるには、タカが彼が指導した選手に求められた労働観と努力が必要であった。

タカが指導した選手が成績を残し、タカの指導能力が段々と評価されるようになったと同時にイースター柔道キャンプの評判が高くなり、参加者の数も増えてきた。イースター柔道キャンプのクラレンス警察市民クラブでの初開催の数年後、開場がクラレンス警察市民柔道クラブからロクビー警察学校へ移動された。警察学校で開かれてから、オーストラリア全国各地から実力が高い選手が参加するようになった。警察学校の施設はクラレンス警察市民スポーツクラブより良く、朝練用の障害物コースやグランド等もあり、道場も広く、多くの参加者のより良い環境となった。

稽古が厳しくても悪戯する暇があった。いつも会う機会があれば何時も話す思い出話があります。アサー・モースヘッド氏が同行したビクトリア州のチームが1980年代初期頃のキャンプでの悪戯写真が残っています。



写真27 アサー・モースヘッド氏がクリス・テイラーに水を掛ける

アサーと彼のチームメートはタスマニアの選手を絞って手押し車に乗せホースを使って彼らに水を掛けた。何人かが騙されたと、はっきり覚えていませんが、マイク・ブライアとクリス・テイラーの写真があります。

誰でしたとはっきり覚えていませんが、ビクトリアのチームがやった悪戯を返すための冗談をやったのは、マイク・ブライアかマイク・スタンフィールドだったかもしれません？

アサーは、キャンプにおいて柔道経験が最も長い高段者の一人だったため、シャワー室が付いている一人部屋で泊まっていた。彼の部屋が開いたままになっていたの、彼を騙すチャンスがあった。バナナの上にチョコレートとナッツがかかってあるバナナをそのまま、アサーのシャワー室に置くと、本物の糞に見えた。アサーのシャワー室の中に誰かが糞をしたと思って欲しくて、彼が絶対怒ると思った。彼が怒り、選手全員が彼の部屋に集合することを想像し、彼の大きな怒声が聞こえ、全員がアサーの部屋に集められた。彼は真剣な顔をして集まった人の誰かが犯人だと思い、犯人はタスマニア人だと思ったかもしれません。確かに制裁措置が求められた。



皆が静かにしてアサーの怒声を同情しながら聞いた。真面目な話しであった。周りにいる人の顔の表情を見て犯人を捜した。数分間が経ってから誰かが前に出て、この「糞」を慎重に持ち上げました。アサーは愕然とした顔をしました。前に出てきた人は、その糞に似たバナナを一口食べました。食べているのは、勿論チョコレートとナツが掛かっているバナナです。段々とアサーが解かってきました。皆アサーの顔の表情を見てみんなで大笑いしました。

以上のエピソードはキャンプの3日目のことだったと思います。したがって、キャンプの最後の日まで様々な悪戯が行われ、相手を騙すゲームになりました。最後の日、アサーの部屋に鍵が掛かっていたが、誰かが合鍵を使って、アサーの部屋に入り、軽い冗談として、彼の黒い靴に練歯磨を入れた。今でも靴を履こうとするアサーの顔を想像しています。(アサー・モースヘッド氏2010年没)

私に柔道を紹介したのは兄のジェラルドで、ホバート市のYMCAでの練習でした。1974年頃のことだったと思います。そこでマイク・スタンフィールドとマイク・ブライアという二人の仲間と出会いました。私の柔道人生に渡ってずっとこの二人に強い影響を受け、今でも友人として繋がっています。このYMCA柔道クラブが閉められたか或いは移動したそうです<sup>14</sup>。(新築された。)

タカが指導し始めた時にホバート・ロワイヤル病院の向こう側にあった警察本部の施設の一部だった体育館を柔道場として使えるようになった。畳として使用されたのは、ビニールで覆かれたカーペットしかありませんでした。このビニールがロープでマットエリアの外側にある木製の板枠に付けられていた。このマットを作るために、マイケル・スタンフィールドを中心に基金募集の活動が行われたと記憶しています。ケン・ウィットル氏がこのマットエリアの建設とそのデザインに従事したと覚えています。このマットエリアが広く、乱取り中に壁とぶつかる等の問題は全くありませんでした。YMCAの道場と比べると全く違う広さでした。このマットエリアが柔道専用の稽古場として作られ、そこでタカと初めて出会った。私の柔道仲間の大部分はそこで一緒に稽古をした。稽古は少なくとも週2回あり、週末にはクラレンス警察市民柔道クラブにも出稽古があり、ホバートのクラブにも週末の稽古が行われたと記憶しております。

柔道の稽古で身に付けたのは、腕立て等の様々なバリエーションでした。想像できる腕立て伏せのバリエーションを何回も何回も繰り返し行いました。普段は腕立て伏せは練習の後に様々な形で速いか遅いかのタイミングで数多く行われました。この腕立て伏せは、段々慣れてくるようになり、自然的に練習の一部として行われ訓練となった。後に、クライミングロープも購入され、このロープを体育館の天井まで登るのは、難しい課題でした。実は難しいだけではなく、大変な挑戦でした。

<sup>14</sup> ホバート市 YMCA 柔道クラブはサックヴィル通りに移動しました。アルガイル通りの旧施設が警察に使用されるようになった。



写真28 2010年、パースで撮影されたタカの姿

柔道の稽古で、ダギー・ドスト氏と出会ったことも覚えています。彼はジョン・ハリー氏の友人だったと思います。二人とも元々ラグビーの選手で、粗野で、体力的に強かったですが、特にダギーの方が強かったです。ダギーは畳の上で会った選手の中で体力的に最も強くて初心者だったくせに怖い相手でした。皆はダギーより柔道の実力がありましたが、彼は実力で足りなかった分を体力で穴埋めしました。当時、我々は比較的に年齢が若く、ダギーと練習するのは体力的に厳しかったです。したがって、彼と3分か4分乱取りをすると、この山ほど強い男に何とか対応できる逃げ方を身に付けるしかなかった。

私にとって、ダギーとの乱取りは誰か貨物列車を放したと同じ感じでした。列車が来ると分かっても逃げられない状態でした。ダギーとの乱取りは体力対技術の勝負でした。彼に対応できるようになったのは、かなり時間かかりましたが、柔道の技で彼の力を乗り越える段階に至りました。私に乗り越えられたことは彼に平気だったそうです。彼にとって柔道は自分の力を試し、自分の実力を高める挑戦ができるし、仲間と楽しい時間を過ごすことができる良いスポーツでした。

ダグは柔道を継続しました。彼と一緒に練習をした仲間に対する態度は非常に良かったです。彼がクラブの中で尊敬されるようになりました。彼は体力だけでなく、考え方が明確で、知能が高い人だったのです。彼は柔道が引きつける人物の良い例です。

#### Dr. Michel Brousse (Prof. of Sports Science, University of Bordeaux, France)

#### ミッシェル・ブルース教授(スポーツ科学 ボルドー大学フランス)

中島先生は柔道のことを徹底的に研究し、彼の柔道活動において中島先生が柔道の根本的な原理を深く理解していることが反映されている。中島先生は彼の柔道人生において嘉納治五郎師範が残した遺産を尊重している。

初めて出会った時、中島先生は人間を育てる運動文化としての柔道を普及する価値を信じていると強く感じた。

中島先生は仕事には厳格で全力を尽くしており、社会と個人に仕える本当の意義をよく解っている方である。

中島先生と私は柔道研究の仲間として親しく、中島先生と会う毎に毎回知識と科学の両面において豊かになったという感じが残っている。中島先生は研究に熱心で、心が広い方である。中島先生が国際柔道連盟と国際柔道研究者協会のセミナーやシンポジウムにおいて示した知識と情熱を心より感謝しております。

しかし、中島先生が興味を持つのは、柔道に関する科学的と技術的な研究だけではありません。2008年にフランスのボルドーで開催された国際障害者柔道会議の際に、

中島先生はボルドー地域の歴史的な文化と食文化を味わう時間を取りました。中島先生のことを柔道の専門家で、有名な研究者だけとして記述するのは、不十分な記述となっています。中島先生は私の友人の一人でもあります。富士山のふもとで一緒に話をしたり、歩いたり等しましたことをよく覚えています。二人で周りにあった自然を観察し、お寺を見に行ったり、温泉に入ったり、地方の美味しい食事を味わったり等をしました。また、中島先生は鼓手としての使い手であることも深く感動しました。（冗談？）



ミッシェル・ブルース教授

中島先生は、謙遜で、心が優しくて周りの人との交際が好きな方であります。彼の笑顔は文化の差を超えます。また、西洋文化に対する理解が深く、彼の人格の特質も良く、中島先生は柔道の価値観と伝統を新世代に伝えられる方です。

中島先生は日本柔道の上位か、ある代表者でもあります。友人であることは名誉であります。

### **Michael Picken (Yamada Judo Academy, Melbourne)**

#### **マイケル・ピッケン氏(山田柔道アカデミー、メルボルン)**

タカについて懐かしい思い出がたくさんあります。私とタカとの柔道人生は彼が指導した初期のイースター柔道キャンプでの参加が始まりです。私が体験したタカに指導された最初のイースター柔道キャンプは1978年のことでした。我慢できないほどの暑さでした。他の練習より乱取りが好きで、乱取りが始まる前の練習をさぼったレイ・トナー氏のことを覚えています。彼はアイスクリームを食べながら乱取りが始まるまで駐車場で待っていました。どうにかしてさぼった彼に仕返そうと試みました。

私は全国柔道選手権大会の準備練習を目指して1978年から1980年までのイースター柔道キャンプに参加をしました。最初のキャンプはクラレンス警察市民柔道クラブの古い施設で開かれましたが、この体育館はすごく暑かったです。

その後のキャンプはロクビーの警察学校に移動されました。旧施設と比べると、ロクビーの宿泊は楽でした。古い道場で我々はマットの上で寝ました。それに対して、ロクビーで宿泊できる部屋がありました。皆と一緒に道場で寝た時、煩くいびきをかき人がいました。タカの後輩で、国土館大学の柔道の先生でした。中野先生は、体格が大きく信じられないほど煩くいびきをかきました。また彼は強く畳の上でも大変でしたが、寝た時が一番大変でした。（爆音いびき）

私はメルボルンにおいて山田明という日本人の先生に習っていましたがにもかかわらず、タカは私に対していつも優しくかったです。省みると、タカは努力する人に対してはいつでも公平に接していたと思います。

イースター柔道キャンプは私にとって非常に良い追加練習となり、この練習の結果試合での成績に役立ちました。私は1978年、1979年と1980年に71キロ級のナショナルチャンピオンになり、1979年のパリで行われた世界柔道選手権大会と1980年のモスクワ・オリンピックを含め多くの国際大会にも出場する権利を得られました。

イースター柔道キャンプにおいてタカと練習できたお陰で国士館大学との縁もできました。タカが私と選手として競技成績を残したマイケル・ヤング氏を国士館高校に連れて、週末の練習に参加したのは、印象的な思い出が一つであります。国士館高校の練習は地獄でした。我々が国士館高校を訪ねた当時、今は柔道の有名人として知られている斉藤仁選手は高校生で誰も知らない、ただ体格が大きい明るい性格の青年でした。

数年が経ってからこの国士館高校との縁が再び活かせるようになりました。偶然に、私の息子が国士館高校で練習することになった。ビグリア州のタロー・メルコム氏という日系人の青年に関連したことでした。タローは私の息子と一緒に日本で練習するように誘った。二人とも、回りに期待されていた柔道のジュニア選手でした。タローは、日本人のお母さんを通じて日本との縁があったが、タローは当時でも世界中に柔道の強豪校として知られた国士館大学のことを全く知らなかった。私は息子とタローの計画を聞いて笑いましたが、もちろん心配もしました。我が息子のデーが国士館高校で練習した期間に、タカは優しく息子の面倒を見ていただき心より感謝しています。

その後、アサー・モルスヘッド氏との関連を通して再びタカと出会える機会が二度あり、久しぶりにタカと握手して大変喜ばしいことであった。タカも私も柔道を愛好しているので、彼は私の柔道の活躍を喜んで見ていると思います。私は28年間柔道を続けて柔道クラブを開き、現在ビクトリア州柔道連盟の会長として任務しています。

私の立場から見ると、タカの影響力が広がると同時にタスマニアの柔道が彼の指導下で咲かれるようになったのは、中島先生の貢献であります。私は彼が指導したステイブ・スミス君とケリ・ウェーカフィールド君等の優れた選手も含めた柔道家と遠征に出掛けたことがあります。タカの帰国後、テラー君、ブアイア君、ランプキン君等がオーストラリアの柔道に強い刺激を与えたことを通じてタカのレガシーが継続していると思う。1980年代の後半、タスマニア州はオーストラリアの柔道界を主立った地域へと発展していった、これはタカが指導した時期に直接に関連できる出来事であった。マイケル・ブライア君が後にニューサウスウェールズ州柔道連盟の会長になったのも著しい展開であります。

以下の写真は私が初めて参加したイースター柔道キャンプの写真です。この写真には著名な柔道家の姿が数多く見られます。このキャンプのレベルは高く、楽な練習相手はいなかったほどのレベルだったと記憶しています。マイケル・ヤング君は2回オリンピックに出場した選手で、トレバー・ビルニー君は2回のナショナルチャンピオンで、アンドルー・ブケンネン君もナショナルチャンピオンになりました。ステイブ・



スミス君はタスマニアの選手として始めてナショナルチャンピオンになり、ジョン・ディーコン氏はオーストラリア柔道連盟の会長となりました。

タカについての思い出がたくさん残っています。私はタカのことを心より尊敬しております。我が息子は国士舘大学まで至る柔道旅行に旅立った時、タカは彼に対して非常に優しくしたことには、心より感謝しております。タカに役立てる機会があるなら、喜んで、名誉なことでもあります。



写真29 1978年度のイースター柔道キャンプ

後ろの列に中野先生（左より1人目）、伊藤先生（左より2人目）、ケリ・ウェークフィールド（左より3人目）、マイケル・ヤング（左より4人目）、マイケル・ピッケン（左より6人目）、アンドルー・ブケネン（左より10人目）と仲澤（旧姓：高寺）先生（一番右）、中の列にステイブ・スミス（左より2人目）、トレバー・ビルニー（左より三人目）と中島先生（一番右）、前の列にジョン・ディーコン氏（タカの前）の姿が見られます。

### Kazushi Ito (Principal of Ichinoseki Daito Junior High School, Japan)

伊藤 一志 先生(岩手県 一関市立 大東中学校 校長))

#### タスマニア イースター柔道キャンプによせて

(Good old Memory for the Easter Judo Camp in Tasmania)

あれは忘れもしない1979年4月、オーストラリア・イースター柔道キャンプ(合宿)がタスマニア州警察学校で行われるということで、オーストラリア柔道協会から指導者としメルボルンに在住していた私は、日本体育大学先輩の仲澤進先生と共にタスマニア島(州)に初めて向かいました。

キャンプは、1日10時間、4日間の日程ということで、厳しい内容になるであろうことは仲澤先生より聞き及んではいたが？ しかし、いったい誰がこのキャンプを取り仕切っているのでしょうかと云う疑問が浮びました？その人は国士舘大学出身の中島紘先生という方であることは仲澤先生から伺ってはいたが、私自身お会いする前の中島先生のイメージは、国士舘大学柔道部出身でタスマニア州警察学校の教官をされているということで、さぞやガタイ(身体)が大きく柔道の猛者だろうと想像いたしておりましたが、想像とは裏腹に身長は158 c m程度、体重は60 k g ぐらいの小兵であり、常に笑顔でいる中島先生には、虚を突かれました。

キャンプは、早朝5時から始まり、10 k mランニングで始まり、続いてダッシュ・肩車・手押し車・ウサギ跳び等々2時間。朝食後は3時間の寝技のみの稽古、昼食・休

憩をはさんで午後は立ち技3時間。更に夕食後は、技の研究と形稽古を2時間というメニューであった。

初日で緊張も手伝ってか何んとかこなせたが、2日目の筋肉痛は筆舌(ひつぜつ)に尽くしがたいものであった(：文章や言葉ではとても表現できない)。そして3日、4日目は疲労困憊のピークで、私を含め参加者のほとんどが、青菜に塩のごとく(しおれてしまう状態)生気がなかったように思う。しかし、ただ一人年齢にそぐわず、初日から変わぬ動きを示し、活潑地(かっぱつはっち：生き生きとして勢いのある様子)で取り仕切中島先生には、驚きと同時に凡人(ぼんじん：他人より抜きん出た人)とは思えないほどの活力で、畏敬(いけい：おそれて敬う心情のこと)の念を抱かざるを得なかった。後に聞いた話であるが、タスマニア警察学校では、King of TAKA と呼ばれ、署員はもとより地域の方々からも尊崇(そんそう：尊びあがめること)されていることであり、全くもってうなずけた。

何とか4日間フラフラになりながら頑張り通し、最終日を迎えた。やり切った充足感(じゅうそくかん：満ち足りた様子)はあったが、血尿が出た。それくらいハードであった。

キャンプ打ち上げパーティーは、苦しいキャンプを成し遂げた充足感と解放感が相まって、おおいに盛り上がった。その後、私たちコーチ陣は、中島先生が酔いの勢いに任せてカジノに行こうと言われ、ご自分のミニクーパーを用意し、大の男4人がギューギュー詰めの状態の中、中島先生酒気帯び運転でカジノに向かった。(飲酒運転免許取り上げ) また、赤信号も無視されたように記憶しております。(飲酒運転+信号無視=禁固刑)しかし、警察の方々も見ると見かねてパトカーで先導して頂き(これって、あり?)カジノの入り口に着くと、入り口ドア付近に立っていた屈強(くつきょう：強く、しっかりしているさま)なバンサーが、中島先生や私たちに、最敬礼をしてくれました。中島先生は、バカラをされて約40万円ほど勝ち、その後は、こんなあぶく銭は派手に使うに限るといわれ、カジノの上階のある高級ディスコにまかり出た。そこは、高級感漂うディスコで、女性はイブニングドレス、男性はフォーマルな出で立ちで踊っていた。酔っていた私たちは、よれよれのジャケットだったが、構わず中央のミラーボールの下で踊り始めた。私は、生まれて初めてのディスコなのでどのように踊るのか解らず先生に聞いたら、柔道の打ち込みのステップでよいと言われ、そのように踊った記憶があります。周囲には希有(きゆう：不思議なさま)の目で見られ嘲笑(ちょうしょう：あざけり笑うこと)を買い、おおいに恥をかいたことを昨日のここのように思い出させます。こうしてキャンプは終了しました。

このキャンプを後々考えたら、柔道発展途上国のオーストラリア、柔道のレベルアップや柔道協会・柔道連盟の組織改革におおいに貢献したのだと思えた。

また、このキャンプを通して、私自身、指導の在り方や人への接し方等多くの人生勉強をさせていただき、成長させていただいたこと、中島先生、仲澤先生を始めオー



伊藤 一志先生

ストラリア柔道連盟に、心より感謝申し上げる次第です。日本国内外問わず、何度も行ってきた柔道合宿の中でも、最も忘れられない合宿であることは間違いのないことであり、言葉では言い尽くすことができない、私の人生の財産であります。

イースター柔道キャンプに携わった関係各位に感謝と御礼の言葉を申し上げます。

(2013年2月1日記)

## Rod Warrington (Rokeby Police Academy) ロッド・ウォリングトン氏(ロクビー警察学校)

タカ・中島は警察において護身術の教官として勤めていました。タカは日本の国士舘大学から来ました。警察学校において指導された護身術は柔道と合気道の技法から成り立っていました。

タカと初めて出会ったのは、1972年2月に16才のコデットとしてタスマニア州警察学校に入った時でした。ロクビーの警察学校で2年間訓練を受けなければならなかったからです。

ある日、体育館の事務室にいた時、タカと出会うことになりました。タカは忙しそうで、デスクの引き出しを開けたり、閉めたりしていました。何かを無くして急いで捜していました。最終的に彼が無くしたのは財布で、見付けることが出来ました。この財布を掲げて私に見せていました。「財布がないと、飲みに行けないだろう。」と言いながら事務室を出て行きました。その時、この人が私の人生に大きな刺激を与えるようになる人物と出会ったのは、まだ解っていませんでした。

タカは16才から18才までの青年警察官を対象にした護身術の指導を担当しました。簡単な課題ではなかったかもしれませんが、学生全員24人でタカを攻めようとした機会もありました。呆れるほどでしたが、彼は我々の大人数に負けずいつも何拾人を相手に対応ができました。最後に彼をくすぐろうとしました。タカに勝つにはこの方法しかなかったそうです。

生意気な学生には、タカは「ヨーヨー・トレーニング?」という方法で指導されることがありました。「ヨーヨー・トレーニング」とは、タカに何回も投げられる意味でした。タカの投げ技には抵抗できませんでした。

(おもちゃのヨーヨーの如く、立っては投げ、立っては投げられる練習でした。)

我々が練習で使ったビニール製の畳のことを懐かしく思い出します。この畳が古くて、指を詰められた。畳の擦りに傷がよくありました。実は、この畳が硬く錬兵場とはほとんど変わらなかったぐらいでした。

(体育館のフロアーに直接柔道用の畳を敷いた程度の道場。)

タカは興味があったコデットをmini-coupeか Volks Wagen でホバート市内のリパープール通りの警察署の後ろにあった道場の練習に連れて行きました。タカの柔道よりも彼の運転の方が怖かったです。この車での移動は楽しいが怖いこともありました。(チョー恐怖！)

ホバートの道場において我々コデットはタカの強化選手に歓迎され、練習の90分ぐらい投げられっ放しで、下から天井を見上げる状態を過ごすことになった。練習の何回目にホバートの道場の天井ばかりを見て、この天井が面白くなり建築家になろうかなあと思うぐらい考えました。(？)

ホバートの道場においてマイケル・ブライア君、ディーン・ランプキン君、マイケル・スタンフィールド君、フィリップ・マック・ドーマット君、ピーターとジェラルド・ステファニフ君、ビル、ピーターとクリス・テラー君達とは家族のような仲間になりました。私は続けて練習に参加し、仲間に面倒を見てもらい、皆と友達になることができました。

タカが指導したおかげで、生徒の成績はタスマニアの柔道は全国的レベルで強くなりました。私はせめて受け身だけでも誰にも負けませんでした。私の受け身は形の大会で優勝できるぐらいでした。

タカの指導の下で警察とは別に柔道を継続し、今日まで柔道を続けています。

幸運なことですが、2003年に警察学校のオペレーショナル・スキル・ユニットに勤め、護身術を指導することになりました。今日までこのポストで任務しております。運命の輪が一回転したと言えます。このポストに任命された時にタカにメールを送りました。ずっと彼と連絡することがありませんでしたが、タカは私のことを覚えて時間を取って返事を頂きました。

タカ・中島は珍しい人です。彼には回りの人を個々人が自ら成長できるように躍進させる力があります。練習中にタカによく言われたのは、「柔道は人生の道だということです。」当時の私はバカな話しだと思っていましたが、年が経に連れ、この言葉の正確性が評価できるようになりました。タカが教えた生徒の大部分はエリートレベルの柔道だけでなく、人生にも成功ができました。タカの柔道や護身術に関する知識は誰にも比較になりません。今でも1970年代後半にタカに教わった技を思い出しています。これは彼の指導者としての実力を明白に示す例であります。

タカ・中島のおかげで、私の中で勉強したいという気持ちが燃えるようになってきました。今日でもこの気持ちは私の中に燃えています。彼の独特の人格は、彼の生徒と仲間の彼に対する忠誠を励みました。今日までタスマニア警察の年長の警察官はタカのことを良く覚えて彼の話を何時もします。

タカは見本を示しながら指導した人でした。彼は直感的で優しくて。彼の指導者としての位置が最初から感じられたので、彼の権威を設ける必要がありませんでした。



タカは彼の時間を無私に使い、ユーモアのセンスもありました。

彼が私の人間と柔道家としての成長に与えた刺激が言えないほどです。彼と彼が私に与えた影響がなければ、今の私はいなかったと思います。

タカの息子豪州がメルボルンでの結婚式の後、タスマニアを訪ねた際に、豪州と新妻未来と会う機会があって、大変喜ばしいことであった。豪州と最後に会ったのは、彼が小さい柔道着を着てお父さんのタカと畳の上に立っていた小さな子供だった時であります。(1981年 豪州6歳)

タカの後任者の竹村俊幸氏「トシ」と2年間働く機会があった。(国士舘大学卒)

タカ・中島を先生と称するのは名誉であります。中島先生と中島先生のご家族のご健康に心より祈っております。中島先生に彼のレガシーが今日までタスマニア州の警察アカデミーに大事されていることを知って頂きたいです。

### **Bronilyn Smith (University of Tasmania Aikido Club)**

#### **ブロンリン・スミス氏(タスマニア大学合気道クラブ)**

中島「タカ」を思い出するように言われると、最初に頭に浮かべるのは、彼の優しい笑顔のイメージであります。彼が顔の全てが輝くようになった笑みを讃えます。タカ笑顔は彼の明るい性格を反映しています。

タカと彼の特別な奥様の愛子を友人と言えるのは名誉であり、タカが私の50年間近くの合気道人生に与えた影響も高く評価しております。タカは彼の武道の知識と道徳を無私の精神で教えました。この横溢と喜びの雰囲気は皆に刺激を与えました。この雰囲気は彼と練習する機会があった人々の心の中で印象深い思い出として残っています。

タカは警察学校の任務と柔道関係の活動で忙しかったため、合気道の立場から見ると、タカと合気道の練習する機会があったのは、望んだより少なかったです。しかし、タカのコミュニケーション能力、様々な背景と実力を持つ人々を指導と応援する能力は富士流の組織と個人的な面にも残っているレガシーであります。私達の生徒の中で数多くの人が指導者になりました。

タカが残したレガシーは私が指導している合気道の基盤となっており、オーストラリアにある武道関係の組織と交際したり、合気道の関係でイギリスやヨーロッパ等を含めて海外に行った時に大きく役に立ちました。タカに教えられた合気道の精神は私の力になり、私が国内外にも考案、指導と発表した護身術の基盤にもなりました。

以下はタカと経験した個人的なエピソードであります。

#### **友愛—**

1970年代半ばごろに坂のある土地に夫のジムと家を建てることにしました。煉瓦を運んできたトラックの運転手はこの煉瓦を建築現場に至る私設車道の底に下ろしまし

た。夫のジムはこの数千本の煉瓦を自分の力で動かさなければならないという話を聞いて、タカは手伝いに来て、ジムと一日をこの煉瓦の「山」を動かすことで過ごしました。

#### 文化―



写真30 「秘密のチップス儀式」？  
手前右よりタカ、ジョン・マコーミック氏、ロブ・リチャードソン氏とトシ・竹村氏の姿が見られる。

私がロクビー警察学校で参加する名誉があった「秘密の儀式」は文化開化への大貢献になったには間違いがありません。この「大チップスの儀式」を指揮した中島師範とジョン・マコーミック氏等の参加者による、この儀式が日本の伝統に従って行われました。この儀式は場所が広いタカの事務室に開かれ、窓が外から見られないように覆い隠されました。食堂からお盆の上に置かれたチップスが式次通りに事務室に運ばれました。また、オーストラリアの名物であるトマトソース

の瓶とキッチンペーパーのロールが一つ儀式に使われました。

(ポテトチップス儀式？)

#### 日本スタイルの笑顔の紳士―

初めて日本に行ったのは1985年のことで、その時ティム・ウォータス氏と一緒にでした。この旅行において一緒忘れられない中島カリスマの力が見識できました。タカは職場の同僚の自動車を借りて、ティムと私を乗せて自信を持ちながら東京のものすごく狭い道を運転しました。中島先生は交差点と警笛を笑顔と手の振りで対応しながら運転を続けました。

#### 合気道の演武―

タカは警察学校で任務した最初の頃に、熱心で武道の普及に尽くしました。タカがその目的で演武を行いました、警察官の中で参加者演武が少なかったため、タカの指導とカリスマに付いて同行した合気道家もこの演武に参加することになった。1970年代のロイヤル・ホバート・ショーの会場において施設が少なく、合気道着に着替えるには公衆トイレを使うしかありませんでした。また、地はぐちゃぐちゃで、サンダルよりラバーシューズが必要でした。演武会場それとは別な問題でした。よく覚えられているのは、柱があったパビリオンという会場でした。マットがどうにかこの柱を囲んで敷かれました。したがって、投げる或いは投げられる場合、相手が自分はこの柱とぶつからないように技をかける或いは受け身を取るしかありませんでした。ある年、パビリオンのスペースをラジオ放送局と同時に使うことになりました。ピンク色のキャ

デラックを使って放送された激しい音楽放送のコンテストが続けられました。合気道の解説がほとんど聞こえなかった事は、いう必要ありません。

#### 練習―

1970-80年代の稽古は今日の計画通りの稽古とは全く違うことで、体験を通じて学んだことが多くありました。受け身は弾力性があるマットに限られていませんでした。中島先生に技をかけられて、空中で投げられ方向さえ解らなくなってきた状態をよく覚えています。しかし、どうにか「？」でした。中島先生は私が受け身を取れると信じていましたので、この状態になったのであります。タカが指導に来られた時の合気道のキャンプは練習のハイライトとなりました。この際に、タカに肉体的の面だけでなく、黙想、合気の精神等を含めた精神的な面においても新しい方針へと導かれました。稽古は真剣でしたが、大事なことですが、楽しい時もありました。

#### 継続する縁―



写真31 タカとブロンリン・スミス。2001年タスマニア大学新道場の開場式にて。後ろにタカが大学に寄贈した書道作品「氣」が見られる。

時間が経ったと同時に様々な噂と本当の話も含めた「タカの物語」が広がってきました。富士流との縁が始まった大学の合気道道場はタカとつながった合気道の展開の中心にありました。新道場の建設が2001年に完成された時、タカは日本から落成式に参列し、タスマニア大学に美術作品を寄贈しました。(公益法人・創玄書道会・鈴木謙風作「氣」)

しかし、彼が残した広い心と精神は彼が合気道と私自信に与えたレガシーであると信じております。

**Susumu Nakazawa (Vice-Principal, Private Correspondence School, Japan)**

**仲澤 進先生(翔陽学園 土浦学習センター 副学校長)**

「Good old memorial Easter Judo Camp in Tasmaniaに寄せて」 By S. Nakazawa

私がオーストラリアに滞在した7年間の中で、最も心に残っているのが、この「Easter Judo Camp」(以下Camp)です。

あれから早や40年近くが過ぎようとしており、月日の経つ余りの早さに驚きを感じざるを得ません。

このCampでの一つ一つの出来事は、私にとって忘れることの出来ない宝物となっており、あの時間を共有できた中島先生や伊藤一志、それに多くのオーストラリア柔道の友人の事も忘れることは出来ません。

Camp最終日の打ち上げで、浜辺で行ったバーベキュー、そして海に入っ

て中島先生やKazushiやCampに参加していた仲間と投げ合った事は掛け替えのない思い出となっております。

Campでは、毎朝行う10Km走、午前中に寝技を中心とした稽古、午後は立ち技を中心に乱取り稽古、大学生に戻った様な気分で練習したことを昨日の事の様に思い出します。

私は、このCampに6回参加していると記憶しております。参加する切っ掛けになったのは、タスマニアの北にある町ローンセストンで行われたJudo Campに参加した折り、中島先生と出会った事でした。

中島先生からホバートでJudo Campを計画しているので参加しないかと誘われたのが始まりでした。中島先生とはローンセストンで初めて出会ったにも関わらず、意気投合し、多くのことを語りながら、その日の夜は二人で朝まで飲み続けましたが、若かったことも有り、次の日も普通に練習を行いました。

このような事、全てが私の人生の素晴らしいページを飾ってくれていることを誇りに感じており、人生を豊かなものにしてくれています。何時までも薄れることのない思い出となっております。

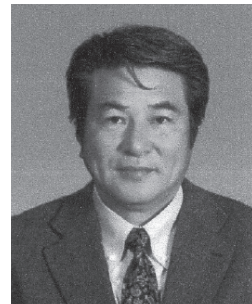
日本に帰国してから故郷に帰り、公立高校の体育教師となり、柔道の指導も続けて来ましたが2007年に校長となり、2012年3月に定年退職しました。

現在は私立通信制高校の副校長として勤務を続けております。

私の新たな人生のページを飾るためにも、2014年4月のEaster Judo Camp には、是非参加して、多くの柔道の友人と再会したいと心から願っております。

最後になりますが、Easter Judo Campが益々発展し、オーストラリアの柔道が普及発展されることをご祈念申し上げて寄せる言葉とします。

以 上



伊藤 一志先生



**Paul Scambler (Launceton Aikido Club)****ポール・スキャンブラー氏(ローンストン合気道クラブ)**

初期の中島「タカ」中島先生の思い出



写真32 初期の合気道キャンプの写真。

大学合気道クラブがコニングハムで開催した合気道講習会をよく覚えています。以下の写真がこの講習会で撮影されました。この写真において私は父のレンの隣の前列に座っています。父の隣にタカの姿が見えます。

1977年、このキャンプが大学合気道クラブの主催でコニングハムユーズセンターにおいて開かれた。クラブのマットが少なかったため、練習ができるマットエリアダイニング

ルームの広さしかなかった。後に購入されたマットでスポーツホールの広さが全部使えるようになった。

朝練習のため、タカと海岸に向かったことを思い出しています。砂の中で座れるところを作り、砂浜で黙想を行ってからキャンプへ戻り、朝食を取ってから合気道の練習に入りました。

1978年にタカを審査員にして5級への昇級審査を受けました。その後もタカの下で昇級し、タカの下で1980年に1級を合格しました。

タカは警察学校の士官生を連れてバニーとローンストンのアグリカルチュアショー（農業展覧会）等のところで演武を行いました。父のレンと私は合気道の演武を手伝いました。

バニーの展覧会で演武を行った日はすごく暑くて、我々が使ったマットの上に立った時に足がとても熱くなってきました。したがって、足を火傷しないようにずっと動きながら技を演武するしかありませんでした。

また父はタカと練習するためにロクビーの警察学校まで行きました。ある日、父と道場に着いた時、タカは士官生に5キロのランニングを指示しました。士官生がランニングから戻ってきた時、私達の練習がまだ終わらなかったもので、タカが士官生に10キロのランニングを指示しました。私達は練習を続けました。警察学校まで行った際に、父は帰り道にアルガイル通りにあった道場の合気道クラブにも練習しに行きました。

この道場で練習した時のことを覚えています。この道場での練習を考えると、タカは私を優しく投げて頂いたということを思い出します。受け身が易しく、小さくて体重が軽いためだったと思います。私はタカに投げられたことが楽しかったです。彼の技がほとんど感じらなく、柔らかに受け身が取れたため、受け身の方も少ししか感じられませんでした。



写真33 2001年の大学合気道クラブの新しい道場の開設式においてローンセストン合気道クラブのポール・スキャンプラーを刀取り技で投げているタカの姿

タカと最後に練習ができた機会は2001年のことでした。タカが大学の新しい武道館の落成式に参列するためにタスマニアに戻ってきた時でした。私がタカに刀取りの技で投げられた瞬間に写真を撮らせてもらいました。この写真は私にとって特別な写真であります。

私はタカ先生のことを心より尊敬しており、タカとの練習を一生忘れられません。彼が指導した技法と教えは私の合気道の重要な一部であります。

### Timothy Waters (University Judo and Aikido Club) <sup>15</sup>

#### ティム・ウォータス氏(大学柔道と合気道クラブ)

人生の中で、価値があり、心に残る業績に遭遇する機会があります。私にとって中島紘先生との出会いに関連する出来事の一員になれたのは、こういう機会でした。私はこの機会を両手で掴みました。満足しながら当時の出来事とイベントを思い出しています。私の立場からタカをタスマニアに誘致し、彼のタスマニア州警察での採用までに至った経緯の一員になったのは、価値があり、実際に心に残る効果があった出来事であります。

タカに柔道を指導して頂いたこともあります。特に彼の合気道にかかわる知識と実力に興味を持っていました。タカのことを私にとって合気道で最も重要になった先生として尊敬しております。タカは色々な意味で武士道の典型であります。タカは実力が高く、彼の人格は武士道に含めた価値観を体現しています。特に、タカ自分の知識を保有せずに分けるという気持ちは、他に出会った武道の指導者とは異なっている特性です。自分の生徒より上の立場を保つために技を保有する指導者がありますが、このような指導者は、技を保有することを通じて自分が求める立場と尊重を達成することができないという事実を理解していません。タカのアプローチはそれと全く逆方法で、タカが彼の生徒と仲間になった人々に高く評価されています。

1981年に合気道の修行者という立場で日本に行った際にタカの師匠菅原月洲師範の指導を受ける栄誉がありました。タカは菅原師範の弟子だったということが明白に分

<sup>15</sup> 1954年、タスマニア大学において今日まで至って続いている柔道のクラブが設立された。このクラブはオーストラリアの最も古い大学柔道クラブである。1970年代にこのクラブで柔道を指導したティム・ウォータスは1971年に合気道も柔道の追加練習として導入した。後に、柔道と合気道のクラスが別々に開かれるようになり、合気道の導入と同時にクラブの名が大学柔道合気道クラブに変更された。ティム・ウォータスは1970年代末に柔道の指導から引退し、合気道に集中することになった。これをきっかけに、両種目が別々され、柔道部が大学柔道クラブとされ、合気道部が大学合気道クラブとして独立した。

かってきました。菅原師範にもタカと同じ優しさで自分の知識を何も保有せずに伝える情熱がありました。



写真34

日本に行った際にタカに熱狂的に応援されました。タカは私のために国士舘大学で宿泊を手配して頂きました。当時、富木合気道協会会長大場秀雄先生は国士舘大学において合気道の主席師範として指導されていました。当時、富木合気道の会長。偶然な出来事です。日本に出発する前、偶然に大場先生がメルボルンに訪問されました。タカは大場先生のことをよく知っていたので、挨拶と紹介を

得るためメルボルンに行きました。

大場先生はジョンとレオニー・ゲイ氏の招待者としてメルボルンにいました。ジョンとレオニー・ゲイ氏は合気道の高段者で、オーストラリア合気道連盟の役員でもありました。タカと私も誘われてメルボルンでの滞在を一緒に過ごすことになりました。大場先生に紹介されたおかげ、1981年3月に国士舘大学に着いた時に大変歓迎され、練習プログラムまで至りました。

タカから学んだことが山ほどありますが、特に良い指導者になるための「第一は安全」、「第二は楽しさ」とう条件を身に付けました。タカによれば、生徒が安全な環境で練習を楽しむことができると、自然に成長することになります。

タカはリアリストでもありました。彼に合気道の稽古を始めると無限の情熱があるかどうかと聞かれた機会を思い出しています。私は「はい」と答えました。続いて、彼は日本人と西欧人の違いを説明しました。タカによれば、西欧人にとって黒帯は目的としての全てであるが、それに対して日本において一級から初段への昇段がほとんど強調されておらず、段位は道の一步でしかありません。私が同意してから彼は私が有段者になれば、オーストラリアでの合気道の普及と運営はより簡単になるだろうというコメントを追加しました。当時、私はまだ有段者ではありませんでしたが、新しい目標に向かうようになりました。

道場において、タカは過酷なことは全くしませんでした。しかし、ある日タカに痛みは抵抗する人を教えるためのかぎになると注意されました。ある時、合気道クラブは空手道クラブと合同稽古をしました。各グループは練習時間を半分づつに使って指導を担当しました。この合同稽古の目的は種目を超えて武道の交流を行い、様々な攻撃に対応する方法を研究することでした。タカはこの合同稽古全体の責任者でありました。たまに起るのですが、ある武道を習っている生徒は自分が学んでいる武道を優位なものにし、それ以外の武道は利かないことを証明しようとしています。合同稽古の時に起こった事件です？空手道の生徒で、タカが実演した単純で優しそう

に見える技の効果を疑問に感じた。この生徒はタカの技を疑いました。この空手家が疑問をもったのは、完全に極まれば、相手に非常に痛みを与える二教という技でした。これに答えて、タカは彼と討論せずにこの疑問があった空手家を攻めさして、彼の攻撃を簡単に二教で対応し、この技を普通より以上に極めました。可愛そうでしたが、この生徒は痛そうな顔をしていました。タカは驚いた顔をして誤りました。この技が完全に極められなくても痛かったです。この生徒が納得しました。この有益なレッスンは私の思い出に残っています。痛みにも意味があります。

タカはいつでも公開演武の開催に協力しました。一緒に演武を行った様々な機会を覚えています。特にアングレシーア・バラックスという基地のお祭りにおいてトラックの荷台の上に行われた演武のことを思い出します。タカはチームリーダーでした。我々は全力で攻めて、彼は全力で反撃しました。彼に投げられた瞬間に荷台の端が見えました。完全な受け身を取れば荷台から転げると恐れてタカを放せずに受け身を取ろうとしました。結果として二人で大きく転げ落ちました。

シドニーの武士道柔道クラブからホバートに來た直後、半年過ぎたあたり、私がたまたまダイビングに行くことを知り、彼も興味があり、一緒に行きたいという希望を表しました。友人と合気道の仲間のベルンハード・ヴァン・デ・ギール氏も同意し、タカを一日ダイビングに行くためのにブルニー島に一緒に行きました。我々は時間を取って、ダイビングの危険についてアドバイスし、「安全と楽しみ」のダイビングを説明しようとしてみましたが、しかしタカは気短になって早く海に入りたくなくなりました。

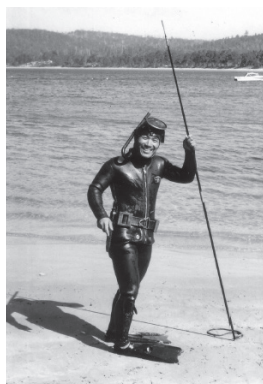


写真35 ダイバーとしてのタカの姿。1973年2月、ブルニー島。

彼の潜水用具を用意し、段々ウエイトベルトの重さになれるため、浅いところから入るようにアドバイスしました。しかし、タカは近くの岩を登って深いところに飛び込みました。タカが入り込んだところは深いだけでなく、揺れていた海藻もたくさんありました。ウエイトベルトが重すぎたため、タカが海藻に根掛かりされ、沈没しました。ベルンハード氏と私はタカを掴んで海面まで持ち上げました。彼は口から水を吐きかけて浮き上がってきました。大きい目で私を見ながら「すごく流れが速く、死んだと思った。」と言いました。その日の残った時間は「安全と楽しみ」で過ごしました。

タカが1972年初めてタスマニアに來た時、ロバート・ウェッド氏は彼に日本ではほとんど味わうことができない日曜大工の楽しさを教えました。タカはタスマニア州警察で任務するために、タスマニアへ戻ってきに時、ロバートがローズベイにあった彼の家の一階を改造した小さなアパートに入居した。このアパートがタカと愛子が到着するまでの数週間の間に急いで準備されたので、棚等の保管所が少なかった。タカは本棚、戸棚等を自分で造ると決心した。最初は台所において階上の棚を造ったが、タカの自信と実力が向上してから戸棚の製作を計画しました。



タカが最初に台所で造った棚はまだ比較的簡単でしたが、戸棚は別のレベルでした。タカが最初の戸棚を作った時に、タカのアパートへ遊びに行った時のことを覚えている。タカはほこりを浴びて、道具のベルトにペンチ、槌等を付け、ベルトのポケットからプラスチックウッドの細長いチューブが見えました。このチューブを何のために使うのかと聞くと、隙間と隙間を埋めることのためだと答えました。タカの天然な自白は無邪気でした。皆さんにも必要になる事でしょう。

日本人の昇級昇段審査へのアプローチは西欧人と異なっています。以前に柔道を経験し、日本から訪ねてきた指導者との出会いもありましたので、この違いを意識し、ある程度分かりました。しかし、タカが警察に勤めて警察アカデミー柔道クラブが新しく作られた時期に再びこの問題と向き合うことになりました。

タスマニア柔道連盟の技術委員会は新しくできたクラブの開会に際にしてクラブの会員を対象にした審査会を開催することを同意しました。私は審査員として勤めることになりました。審査の候補者を応援してきた家族と他のクラブの柔道家を含めた友人は審査の会場となったアルガイル通りの古い道場において良い雰囲気を作りました。審査の候補者はタカの生徒で、大部分は最初の級位となる6級を受けました。残念ながら、審査を受けた柔道家の中で準備が足りなく、タスマニア州柔道連盟の基準に達できなかった候補者は何人かがいました。人を落されるのは簡単な判断ではありませんが、彼らを落すしかありませんでした。しかし、タカの生徒を落されて大変なことになりました。私より段位が高いタカを侮辱したことにもなるであろう。

この問題がタスマニア州柔道連盟に持ち掛けられ、関係者が呼ばれて意見聴取が行われることになりました。ラッキーにその関係者はタスマニア州柔道連盟の昇級昇段規定をよく理解し、私が行った昇級審査は「普通の審査会」だったと供述しました。また、タスマニア州柔道連盟も私の審査に関する運用方法及び評価基準を解かって、私の立場を優位に裁決しました。

私の判定を心配しながらまもなくタカに報告が届きました。タカも審査の記録を受け、国際的な違いもよく承知で私の立場を正しく理解していたおかげで心が楽になりました。タカは審査を受ける生徒を日本の制度に従って教導していたからです。タカによれば、日本において6級の場合、失格する人はほとんどなく、初めて審査を受けて緊張している生徒の激励とされます。この方針をクラブに伝えることで、この問題は解決しました。タカは相手の立場を理解する態度を示し、侮辱を受けた気持ちもありませんでした。不幸なエピソードでしたが、タカと私の永くて、親しい友人関係を強固にした事です。

タカと過ごした最初の頃に彼の英語はまだ発達する段階であり、多くの外国人と同じように彼にとって「breath」等の単語に使われている「th」の発音は困難でした。ある日、大学の旧道場で合気道を指導した時、タカは合気道の技を自分の呼吸にあわせてしなければならないという点について説明をし、技を受ける時に息を吸い、技をかけ

る時に息を吐く等と云いました。稽古中に、タカは皆を「プレスインプレスアウト」と注意しました。私はプロニン・スミス氏の相手になって稽古をしました。後ろから近づいてきたタカを気付かずお互いに「プレスインプレスアウト」と小声で話しましたが、タカに「プレスはどういう意味なの」と聞かれましたが、どこで笑えばよいのか？大変困りました。本当に笑いたかったです。

タカは彼の基本に従い、この基本に関しては妥協はしませんでした。特に安全管理を大事にし、安全対策については全く妥協しませんでした。ある日、大学の旧道場で昇級審査を行う予定でしたが、洪水で畳は濡れ、古くて表面も平らでなかったため、稽古は気を付けなければ危険な状態でした。道場に着いて畳の状態を見たタカは、安全な畳が用意されるまで審査を開催しないと判断してから、そのまま帰りました。おかげで、畳の安全性が改善され、オリンピックの基準に従う柔道用の新しい畳が購入され、新しい道場も建設されることになりました。この新しい道場が2001年に開場されました。

中島先生は人間としても武道家としても非常に優れた人物であり、間違いなく私が指導を受けた指導者の中で最も優秀な先生であります。彼は無私で、彼の知識を伝えたいです。柔道と合気道の高段者であることは驚くことでもありませんが、居合道の演武を行った機会を覚えています。この演武に感動して居合道も学びたいとなりました。タカは合気道のクラスの後、居合道のクラスも行うと勧めました。日本から居合刀を購入し、居合道のクラスも開かれました。



写真36 中島豪州氏の結婚相手の新妻、児玉美紀と、アーサー・モルスヘッド氏（メルボルン・グラマ・スクールの礼拝堂の前にて）

2005年3月、中・高校時代をメルボルン・グラマ・スクールで過ごしたタカの息子豪州は結婚式のため、婚約者の児玉未来と親族を連れてオーストラリアへ戻ってきました。私もメルボルン・グラマ・スクールの礼拝堂で開かれた結婚式に招待されました。私の妻のアイリス、娘のアレクサンドラーとメルボルンのホテルの前で結婚式の Rolls-Royce を待っていました。まもなく結婚する婚約者は最初に着いた自動車に乗り、タカと他の親族・関係者は次の自動車に乗る予定となっていました。しかし、二つ目の自動車に着いたら、タカは私とアイリスがRolls-Royce を乗って、タカ自身はタクシーで行くと決めました。タカの費用で結婚式用の自動車に乗って不適当だと思い彼と話しました。しかし、アイリスと家族・関係者

は後部坐席に、私は前席に乗ることになりました。Rolls-Royce が発車すると、窓から振り向くと、歩道に立ってタクシーを合図する正装の和服を着ているタカの姿が見えました。

この結婚式は記憶に残るイベントとなり、アーサー・モルスヘッド氏は花嫁を礼拝堂に導きました。またこの結婚式のエピソードを記したのは、タカの人柄と彼の親和

を示すエピソードであります。



写真37 笑顔の中島先生。タスマニア大学新道場の落成式にて。2001年。

本文章を書いている際に、特に武道の修行に関して中島先生に大変お世話になりましたと強く感じております。心より感謝しております。無私に、疑問が残らずに技を分かり易く説明し、納得させる正確な技を丁寧に演技するのは、彼の指導力と指導法であります。このような指導法は良い指導者の特性であります。タカは優秀な指導者の一人です。タカは厳しい指導者でもあります、求めるもの

は厳しくても、いつも最も優しい方法で指導しています。幾度も週末稽古の合気道キャンプに参加して、最後まで耐えられて、次の日の月曜日に起きて出勤する苦勞を覚えています。

タカと彼のすてきの奥様愛子と彼らのお子様は我が家族と我が人生の中での特別な存在であります。

## 第11章 中島先生の実歴

中島先生は1943年4月16日、大阪で中島高光・静子の6人の末子として生まれた<sup>16</sup>。大阪の中野中学校と電気通信高等学校で教育を受け同時に柔道を始める。高校卒業後、1964年に東京世田谷区の国士舘大学<sup>17</sup>に入学。国士舘大学体育学部体育学科を専攻し柔道部に籍を置く。また合気道は菅原教授の指導を受ける。後に菅原師範と師弟関係を結ぶ。1968年に国士舘大学を卒業し、大阪市立中学の保健体育の非常勤教諭として勤務する。その他に大阪城内の「修道館」、京都の「正武館」道場で指導。1971年、Mr.ジョンボニフェス氏とNZに渡る。1971～1973年までNZ、オーストラリアで過ごす。

1974年11月23日、岡田愛子と結婚、12月タスマニアへ再び渡航。岡田愛子は4年前に京都「正武館」で出会った柔道の教え子であった。タスマニア州警察<sup>18</sup>の教員として勤めることになる。タスマニアにおいて子供3人、長男豪州、長女朋子と次女桂が生まれる。

<sup>16</sup> タカの兄弟は兄の透（長男）、己智雄（次男）、太久光（三男）と姉の啓子（長女）と摩智子（次女）である。

<sup>17</sup> 国士舘大学は柴田徳次郎氏が1917年に設立した私立の高等教育の機関である。国士舘は武士道の精神及びその伝統を保存するために設立され、武道の指導法と実技及び武徳の研究を中心としている。他のスポーツも徐々に採用されることになった。また、政府に大学へ拡大する方針が指示されてから様々な科目が加えることになった。今日、体育教育、経済学、芸術、商業学、工学等が含まれた幅広い科目において学士、修士等の学位と資格の取得ができる。武道とスポーツは教育の基盤として残っており、学生は学習に加えてスポーツと武道よりの種目を必修科目として受ける。国士舘大学の卒業生の中で全国と国際大会のチャンピオンも含む優秀な武道とスポーツの指導者がいる。国士舘は実力が高く、情熱がある選手を育成する教育機関として知られている。国士舘大学は世田谷、梅ヶ丘、町田、多摩にキャンパスがある。

<sup>18</sup> タカは彼がタスマニアに到着した時にはまだ建設中だったロクビー警察アカデミーに勤めることになり、警察アカデミーは1976年3月に正式に開校された。

1981年に家族と日本へ帰国し。国士館大学の教員として勤務する。国士館大学武徳徳育研究所講師(1981)・准教授(1989)・教授(1999)同所長(2004)となり、また日本柔道整復師の資格取得。

柔道を中心としながら幅広く活躍し、武道の指導法、障害者武道等。業績は以下の通りである。

#### 業績

1997年、日本武道学会理事

1997年、講道館柔道 7段

1981年、国士館大学武道・徳育研究所 講師

1983年、世田谷区柔道会理事

1989年、全日本学生柔道連盟理事

1989年、国士館大学武道・徳育研究所 准教授

1999年、国士館大学武道・徳育研究所 教授

2007年、全日本潜水連盟スポーツダイビング資格の取得。

2007年、一般社団法人・ハートセーバージャパンのAED資格の取得。

2009年、世界柔道科学者協会理事(IAJR)

2001年、(一般社団法人)障害者武道協会創立代表理事

2014年、日本武道学会障害者武道専門分科会創立代表理事

#### 研究発表

タカは世界の事情に強く関心を持ち、人と人との繋げることを武道の主な役割として見ている。

- 2004年ギリシア・デルフィで開催された「The First of Budo Movement for Peace」において日本人ただ一人の参加者で講演をした。
- 1981年以降、武道の指導法に関する研究論文を数多く発表した。以下の研究業績がある。
- 2008年と2010年のスウェーデン開催の障害者柔道シンポジウム・中国のチンタオ柔道協会・ブルガリア柔道連盟の会議において講演。
- 1997年～2003年、日本体育学会において研究発表。
- 2001～2012年、日本応用心理学学会において研究発表。
- 1989年～2013年、日本武道学会において研究論文を投稿。

#### 国際シンポジウム・学会参加

ブレオリンピックスポーツ科学科 kongress に参加。

- 1992年、スペイン・マラガ



- 1996年、米国アトランタ・ダラス
- 2000年、オーストラリア・ブリスベン
- 2004年、ギリシア・テッサロニキ
- 2008年、中国・南京
- 2012年、イギリス・リバプールで論文発表。

また、1995年～1998年にかけてUSJI米国コロラド・スプリングスで開催のUSJIナショナル柔道コーチに参加・論文発表。

アジア開催のスポーツ科学関係のシンポジウム・学会に参加・論文発表。

- 1994年、広島市(日本)
- 1995年、福岡市(日本)
- 1998年、第13回アジア・ゲーム・スポーツ科学コンgres(バンコク開催)
- 1999年、第1回国際武道シンポジウム(韓国・龍仁大学開催)
- 2000年、第2回国際武道シンポジウム(韓国・龍仁大学開催)

この後、中島「タカ」鉢先生は、国士舘大学を退職されますが、更に柔道の研究、特に障害者武道療育活動により一層力を入れられることになるだろうと思います。

## 第12章 タスマニアという行先

タカは武士道柔道クラブと初めてタスマニアを訪ねてきてから丁度40年以上が経過しました。それ以降、タカは何回もタスマニアに戻ってきました。また、タカは自分の家族と友人にもタスマニアを訪ねるように勧めました。以下はタカの家族と友人が行ったタスマニアへの旅のリストとなります。

1972年6月 タカはシドニーにある武士道柔道クラブと初めてタスマニア州を訪ねる。

1972年10月 タカはタスマニア州柔道連盟の招待で半年をタスマニア州で過ごす。

1974年12月 タカは新婦の愛子連れてタスマニアに戻り、警察に勤めることになる。

1976年2月 拳法の高段者である大橋千秋先生と榊原清司先生はホバート市を訪ねる。

1981年8月 国士舘大学出身の竹村俊幸先生と婚約者礼子はタスマニアに着く。トシは警察学校でタカの後継者になる。トシと礼子の結婚式がロクビー警察アカデミーの礼拝堂で開かれた。

- 1988年4月 タカは松永義雄先生を警察学校に紹介と転職の応援をするためにタスマニアへ戻ってきた。松永先生はロクビー警察学校に竹村先生の後継者になった。後にヨシの相手坂井順子もホバート市にくる。
- 1993年6月 タカと愛子は日本武道館傘下の学生武道協議会の団体を連れてホバート市に訪問。日本人武道家によりタスマニア大学のサイル・ステンリー・バルビュリ劇場において演武大会が開かれる。(日本学生武道競技会)
- 1995年 タカの長女朋子はタスマニアへ短期留学のために、1年間ロバートとブロンウェン・ウェッド夫妻と過ごした。
- 1999年 タカの次女桂はニュージーランドの帰りにタスマニアを訪れ、数週間ロバートとブロンウェン・ウェッド夫妻と過ごした。
- 2001年7月 タカは来賓としてタスマニア大学のホバート市キャンパスに建設された新道場の落成式に参列した。
- 2010年11月 タカの長男である中島豪州と妻未来はメルボルンの友人を訪ね、タカと愛子の初孫である長男の魁洲を紹介するためにタスマニアを訪れた。

## 謝辞

タカの友人と彼が指導した生徒の皆さんのご協力がなければ本書の作成は出来なかったかもしれません。第10章にまとめた思い出話を書いて頂いた皆さんに心より感謝申し上げます。特に以下の方々にお礼を申し上げます。タカに多くの質問をした際に通訳して頂いた中島豪州氏、タカの警察での任務に関する情報を提供して頂いたコール・フォガルティ氏、初期のタカにかかわる「タスマニア柔道連盟の冒険」に関する情報及び自分のノートを提供して頂いたモーリス・アップルヤード氏にお礼を申し上げます。パット・ラッファルティ氏も自分のノートを提供して頂きました。タスマニア州警察の警視総監デレン・ハイン氏と副警視総監ドンナ・アダムス氏はタカに関係ある警察の記録へのアクセスを許可し、必要なファイルを提供して頂きました。スージー・モールスヘッド氏はタカに関連する晩年のご主人アサーとについての情報を提供して頂きました。また、ロバート・ウェッド氏はタカの宿舍及びニールソン警察大臣とタカの警察での任務に関する審議に関する情報を教えて頂き、日付等の情報の確認にもお手伝いして頂きました。図書館員ジャニフェル・スミス氏の応援のおかげでマーキュリー新聞の写真が本書に掲載できるようにお手配して頂きました。ジョン・スティーン氏はタスマニア大学新道場の建設の費用及び道場の建設に伴う問題に

について確認し、様々な情報を教えて頂きました。マイケル・ブライアー氏、アンディ・ウィットル氏とマイケル・ススタンフィールド氏が個人ノートに記録したタカのタスマニア柔道にかかわる役割と業績についての情報を頂き大変参考になりました。テリー・ジョルト氏はヨシ・松永に関する情報を提供して頂きました。



写真38

カロリン・ヴィスビー氏とデッビー・キャメロン氏も含めて多くの方々は写真を提供して頂きましたお陰で多すぎるほど多数の写真を頂きました。しかし、本書の頁数と場所が限られており、全ての写真を掲載できず選択する必要がありました。また、カロリンは中島先生が指導された或いは、彼の影響を受けた選手についての貴重な情報を提供して頂きました。皆様の関心、多くの方々の写真とデータの提供及び応援を深く感謝しております。間違って考慮にいれず御礼を申し上げなかった方々には心よりお詫びを申し上げます。

本書に掲載された写真は以下の方々よりご提供して頂きました。

写真 1, 2, 4, 6, 15, 32, 34, 35, 36&39	ティム・ヴォータス
写真 3&24	ビル・ハート
写真 5&25	モーリス・アップルヤード
写真 7, 8, 9&37	マァーキュリー新聞
写真 10&11	スティーブン・スミス、 カロリン・ウィスビ
写真 12&19	ディビッド・ヒスロップ、 コール・フォガルティ
写真 13, 16, 21, 26, 30&31	ブロンリン・スミス
写真 14, 20&28	ピーター・ステファニフ
写真 17, 18&22	コール・フォガルティ
写真 23	ポール・フォックス・ヒュージェズ
写真 27	アンディ・ウィットル
写真 29	マイケル・ピケン
写真 33	ポール・スキャンブラー
写真 38	タカ中島

**謝辞：**



写真39 中島先生と著者。タスマニア大学の道場にて。1988年。

今回、私の定年退職に併せて、このような企画を実施計画して頂いた、ティム・ウォータース氏、ロバート・ウェッド氏、コール・フォゲティー氏そして多くのオーストラリアの友人各位に衷心より感謝と御礼を申し上げる次第です。そして生涯を通して皆様との永遠の絆に乾杯。Cheers！ From Taka Nakajima